

Origami Tanteidan Newsletter 折紙探偵団新聞

52号

コンベンション
ばやりでンナー

第四回

「紙面内部のカドからの造形」

<利用価値ということ>

今回は「紙面内部のカド」からつくりだされた造形の魅力について書くことにする。具体的には、あやめの基本形のでっぺんのような、用紙内部から(正方形用紙の辺や直角のカドからではなく)出たカドを思い浮かべていただきたい。作品が複雑化するにつれ、このたぐいのカドが数多く生じ

るようになり、デザイン的な処理を要求してくる。こうしたカドは紙の重なりが多く扱いにくいもの、という固定観念がかつてあった。無理矢理細く圧縮したり、折り込んで隠してしまうということもたびたびおこなわれてきた。しかしこれは、「沈めて広げる」ことによって非常に扱いやすく、また表情豊かなパーツとなるのである。

<例によって例です>

この技法の具体例としてわかりやすいものでは、たとえば川畑文昭氏の「ユニコーン」「ペガサス」などの「馬の口」があげられる。たった一回の沈めによってつくりだされているにもかかわらず、あんなにも「馬の顔」をイメージさせる形状となっている。また、小笹径一氏の「馬」では、まったく同様の正八角形の領域がそのまま、吉野一生氏の作品のような印象を持つたてがみを合理的につくりだしている。西川誠司氏の「仏面」「天狗」の口の技法は少々変則的だが、この分類に含めることができるだろう。すでに広く知られているような、段折りを繰り返してつくる「口」の形状は「鑑賞者の大脳新皮質(≡近代的理性)で理論的思考をしつつ味わうべきもの」のような印象を受けるのに対し、西川作品の口はより肉感的で、大脳辺縁系(≡原始的感情)に直接訴えかける形状だと思う。さらに、吉野氏の「虎」の頭部はこの技法を複雑な方向に発展させたものとしては究極といえる。猫科動物の頭部に必要な立体感とディテールを詰め込み、しかも単なる写実ではなく高度にデザイン処理された形状となっている。ひとつの部品にこれだけの手間をかけている、という点でも大きな衝撃を受けた作品である。例として挙げた上記の作品はすべ

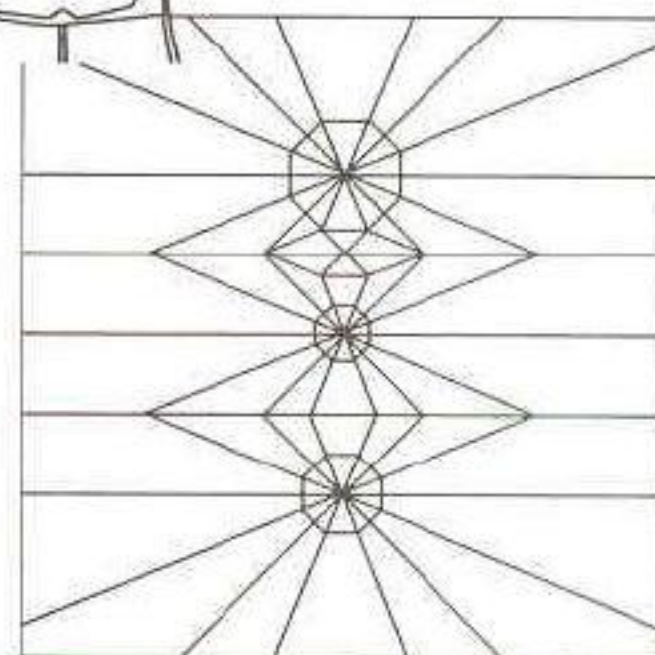
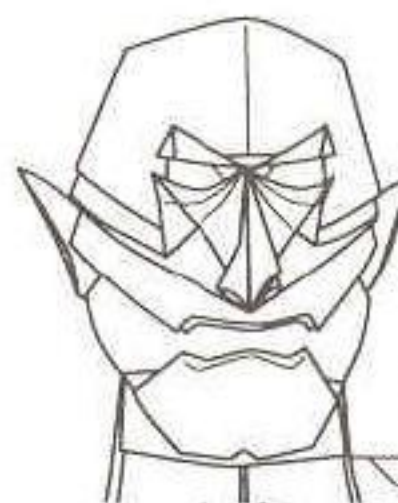
て、計画的にカドの配置を練り上げたうえでつくられていると思われるが、一般的にははじめにも述べたように、こうした「内部カド」の技法で使えるようなカドは、複雑な作品の中へ求める構造を配していったときに、それらの間をつなぐ「折り畳みのためのつじつま合わせ部品」として発生してしまう場合が多い。そんなありふれた領域を使って、鑑賞者の視線をつよく惹き付ける部品をつくりだすことができる。局所的に「複雑さの印象」もしくは「情報量」の桁をふたつぐらい跳ね上げる技法のひとつなのである。こうしたパーツを複数、効果的な位置に配することにより、ひとつの作品の中に「緩急」とか「流れ」のような、従来の折り紙作品ではあまり為し得なかった高密度の味わいを盛り込むことが可能となる。折り紙という方法によって、何時間も何日もかけて鑑賞できるだけの魅力をもった作品もつくり得るのである。(さらに目黒俊幸氏は、余計なカドをなるべく生じさせなくすることにより不必要な厚みを解消し、作品をすっきりと洗練化するための設計技法についても研究しておられるそうだ。これと上記技法との双方をマスターした作家、双方を融合させた作品が陸続と出現する日を、筆者は心待ちにしている。)

<次回予告>

今回までの内容は、川畑氏による「表現技法」という考え方(「をる」3号参照)と重なり合う部分が多い話題だったと思う。次回からは、ひとつの表現方法分野として、従来の「平面作品」や「立体作品」にも匹敵するもの、これらのあいだに位置する分野として筆者が考えている「空間作品」という概念を詳しく説明していくことにする。今回のテーマである「内部のカド」をデザイン的に処理し、重苦しいイメージを排除する有効な手段のひとつとしての「空間的表現」にも関連してくる内容となる。

今回は最後に、筆者の最近の作品「金剛力士像」の頭部とその展開図を

見ていただきたい。まだまだ改良の余地はあるだろうが、この技法をなんとか自分なりに消化し始めたような気がする。



折り紙 という 方法

北條高史



とこが **折紙時評** やねん

前川 淳

まえかわ じゅん Jun Maekawa

■読みたい本が溜まっている。仕事はひと段落したけれど、折り紙をする暇がないなあ。

第12回
折り紙の本

 この国の本や新聞には、左と右がある。とは言っても、政治の話ではない。例えば、「折紙探偵団新聞」は、左から右の横書きである。一方、「デイリースポーツ」(阪神タイガースの記事が多い)や「山梨日々新聞」は、右から左の縦書きである。50数年前までは、横書きはさらに複雑で、見出しなどの一行文は右から左、数学の教科書などは左から右であった。

最近はワードプロセッサの影響か、横書きが増えている。人間の目は横に並んでいるので横書きが合理的なのだという怪しげな説もある。しかし、小説や詩は縦書きでないとしっくりこないし、右から左に時間が流れる「絵巻物」の血を引いているのか、マンガのコマの運びも右から左になっている。これからもこの左右縦横の共用は続くだろう。

ただ、欧米人になったつもりで考えると、彼らの目にこの国の左右と縦横の混在が奇妙なものに映ることは充分想像できる。ほかならぬ「季刊をる」が格好の例である(やっと折り紙の話題になってきた)。この雑誌の誌面が、海外の読者に不思議な感覚、少なくとも文化の違いを味合わせていたことはまず間違いない。本文が右から左の縦書きで、巻末の図が左から右の横書きだったからである。

「をる」の図は左から右だったが、他の折り紙の本はどうだろうか。調べてみると、少し前の折り紙の本は、ほとんどが「をる」とは逆向きであったことがわかる。何でもないことのようにだが（実際何でもないのかもしれないが）、このことを、少し立ち止まって考えてみることにしよう。

読者諸兄諸姉は、日本語の横書きのマンガなるものはほとんど見たことがないはずだ。同じように絵を主体とする情報伝達にもかかわらず、折り紙には左右双方がある。なぜなのだろう。理由のひとつとして思い

つくのは、折り紙に理科系が登場したということである。「折り紙の幾何学」(伏見康治氏)や「バラと折り紙と数学と」(川崎敏和氏)は、数式が出てくるので横書きでないと困る。そしてもうひとつの理由は、「国際市場を意識した」ということである。なんだ当たり前の話だなあ、と思ったかもしれない。事実当たり前の話なのである。(身もふたもない)

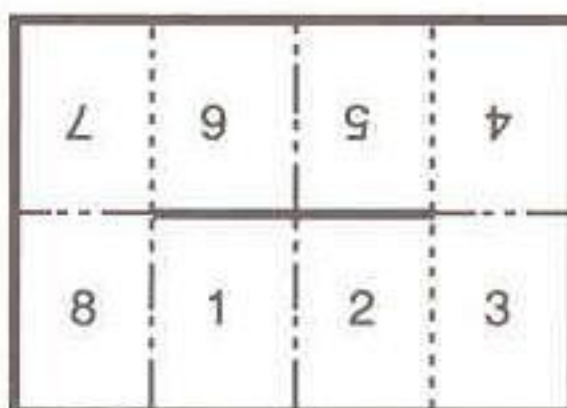
折り紙の図には、「工程を曲線に沿って並べるレイアウト」というものがある。このレイアウトは、今やごく普通のものであるが、実はある種の発明である(創始者は吉澤章氏か?)。それはまず、図全体を絵画化、作品化するという意味が大きいが、わたしにはそれだけであるとは思えない。意識的にか無意識にか、国際的な伝達というものが頭の片隅にあつて、縦書きの時代において左右の流れがぶつかること

と並んでいることがわかる。
 以上は「折り紙の本」に関する話
 だったが、話は変わって、次は、「折
 り紙の技法でつくった本」という意
 味の「折り紙の本」の話題である。

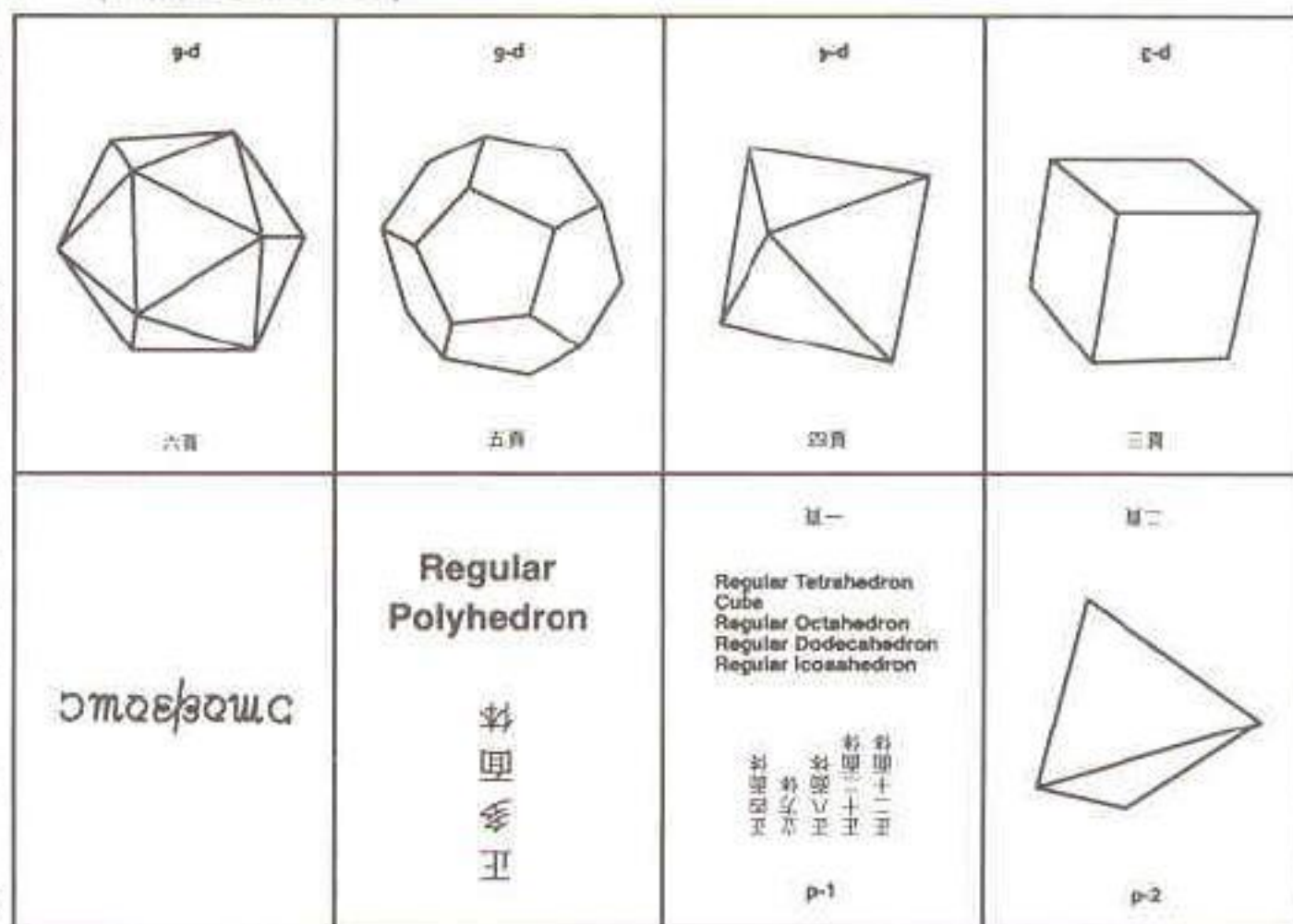
読者の多くは、ウォール氏やブリル氏の「本」を知っていることと思う。わたし自身にも彼らから刺激を受けた同様の作例がある。ただ、それらはあくまでも「折り紙作品」であり、実用というわけではない。

では、下に紹介したものはどうだろう。知っているひとは知っているだろうが（「知っているひとは知っている」ってのは、当たりか・・・）、切り込みを入れて8ページの冊子をつくる技法である。これはまぎれもなく実用である。片面全面を使うところがミソで、コピーや印刷で簡単に複製ができる。サンプルをつけたので、知らなかったひとは、このページをコピーして切り取り、試してもらいたい。本文に関連づけて、右開きと左開きの共用のレイアウトにしてみた。

今回は思いの外まじめな話になったので、その代わりと言ってはなんだが、おまけも付けてみたということで、また次回。



折り本の折り目
(中央は切り込み)



岡村昌夫

第34回

おかむら まさお Masao Okamura

■ご無沙汰しましたが、元気です。



[ルイ14世時代の折り紙]

外国映画の思いがけない場面に折り紙が出てきて驚かされることはよくあるが、今回は全く意外でびっくりした。「仮面の男」という最新の超大作で、なかなか痛快な西洋講談風時代劇である。老いた三銃士とダルタニアン、そしてあのデイカプリオの「鉄仮面」の登場で血わき肉おどる。月光がわずかに差し込む島の地下牢に幽閉された鉄仮面が、過ぎ行く時間の心覚えになんと折り紙を作っているのだった。牢の中にあるものは聖書らしき書物が一冊。そのページで彼は満月の夜にボートを折る。それが12そう溜まると帆掛け船(だまし船)に換えて置く。帆掛け船が六つ並べば6年の歳月の経過を知るのである。わずか数秒のシーンでそんな状況が手に取るように伝わってくる。折り紙の帆掛け船が確かに映っていた。あの石で固められた地下牢内で彼が作り出せるものとして、確かに折り紙の登場には必然性がある。その意味で、「蜜蜂の囁き」のバハリータや、「芙蓉鎮」のはばたく鳥よりもドラマチックであった。

それにしてもルイ14世の若き日という設定で、『好色一代男』の世之介が「比翼の鳥の形」を折るよりも2、30年古い1600年代の半ばの話である。果たしてそんなことが有り得たのだろうか。だがもし映画の時代考証家が私に問い合わせてきたとするならば、私の答えは「帆掛け船なら、存在していても不自然ではない。」少なくともそう答えた人が世界のどこかに居たのだろう、そしてこの映画の製作スタッフたちがそれを不自然と感じなかったという事実は、それだけでもなかなか興味深いと思うのである。ただし、確実な証拠はない。その頃の日本では「折りづる」の存在が十分に窺えるのであるが。

[「帆掛け船」は舶来]

「鉄仮面」から約200年後、「帆掛け船」はフレーベルの「生活の形式」の折り紙の中に入れられ、明治初年に我が国に伝えられた。江戸時代の資料には全く現われず、明治26年の雑誌『小国民』21号に「珍しい」として紹介されていることから、日本の伝承作とは考えられない。(ちなみに「風車」「上着(お化け提灯)」「ズボン(ヤッコ袴)」も同様に舶来折り紙である。これらについては別に書くつもりである。)

「帆掛け船」はバハリータなどとともに、座布団折りを2度また3度くりかえした折り筋で折るヨーロッパの折り紙の代表的な作品である。これらのうち「ダブル・ボート」すなわち「にそうぶね」は日本でも江戸時代からその名で呼ばれて存在していたことが判っている(『和漢船用集』による)。

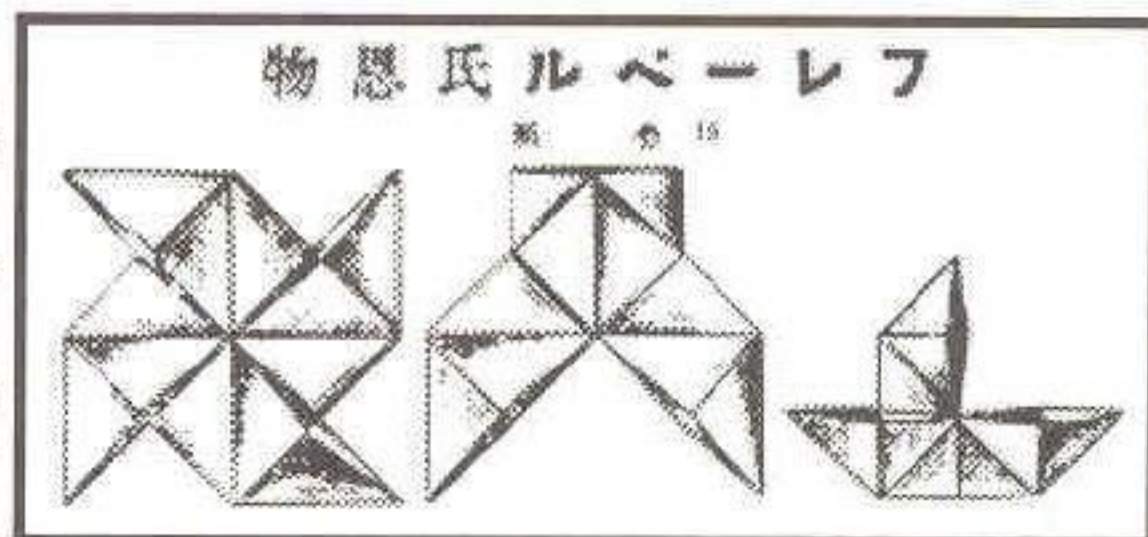
[日本固有論の矛盾]

幕末のパリ万博で「折りづる」が初めて彼の地に渡ったとき、すでに多くの伝承折り紙が向こうにもあったことは疑いのない事実である。折り紙を「日本固有の文化」とする論者は、そのはるか以前に日本からヨーロッパへ折り紙が渡ったと考えるらしい。しかし根拠は何もないだろう。西暦1600年前後までの、キリシタンによる文化交流期にも全くその形跡がなく、遊戯折り紙を指す言葉があったかどうか(ということは、その物があつたかどうか)さえ怪しいのである。当時の辞書類にも全く出ていない。仮にもし、その頃ポルトガル人を通じて、もしくはその後の長崎のオランダ人を通じて、遊戯折り紙の輸出がなされたと

するならば、ヨーロッパ系の折り紙が「座布団」系ばかりで「折りづる」系が無いことをどう説明するのだろうか。和紙文化との関係から言っても、礼法折り紙や顔を丸くつぶす人物折り紙、緊き折りの千羽鶴などを除く、一般の遊戯折り紙の類は、洋紙でも十分に折れるし、その類(これらをフレーベルは「生活の形式」に分類した)の種類はヨーロッパの方が数も多いのである。まして「美の形式」に含まれる抽象的な模様折りについて言えば、残念ながら日本の折り紙は彼等の足元にも寄り付けないのである。

中国で発明された紙がヨーロッパ(最初はスペイン)に伝わったのは12世紀のころとされる。したがって7世紀にムーア人がスペインに折り紙をもたらしただという説をにわかに信じることはできない。しかし、サラセンの正方形文化の影響などを考えてみても、正方形を使用する座布団折りの技法がかなり早くヨーロッパで行われていたらしく、その可能性を示す形跡も残っているようだ。

勿論、長い歴史を持つ和紙文化、出版文化と結ばれた折り紙の、享受層の厚さや広さ、技術の高さ、残された史料の多さなどの点で、江戸時代と同時期に我が国の足元に寄り付けた国は、世界のどこにも存在していなかった。



大正13年刊、森川正雄著『幼稚園の理論及実際』より。共通した折り筋がフレーベル式の特徴である。

第3部第2回 リス

羽鳥 公士郎

はとり こうしろう
Hatori Koshiro

折り紙の哲学

ニューヨークのセントラル・パークで走ってきました。
リスがたくさんいたのが印象的でした。



今回取りあげるのは、小松英夫の「リス」です。この作品の最大の魅力は、太い尻尾にあると思います。では、この尻尾がどのように折り出されているか、構造図で見てみましょう。(図1)

構造図を見ると、作品全体は22.5度ないしその倍数の角度で交わる折り線によって構成されています。

このような作品は、すべての折り線が有機的に関連し合っているという点に特徴があります。そのとき、展開図そのものが美しいものになります。それだけでなく、折っているときにも、カドとカド、辺と辺がピタリピタリと合って、心地よい感触を覚えます。

しかし、この作品のよさはそれだけではありません。図でいうと上の方、リスの頭や手の部分は典型的な構造を示していますが、足と尾の部分はちょっとおもしろい構造になっています。

ふつう、尻尾などのカドを折り出す場合、正方形の頂点から22.5度の線がでるようなかたちにします。しかし、この作品では、上の方からやってきた2本の22.5度の線は、頂点の手前で交わってしまいます。そのことによって、尻尾に使える領域が大きくなり、太い尻尾を折り出すことが可能になっているのです。

通常的设计法では、尻尾の長さだけが問題になりますので、このような発想はなかなか生まれません。これは私の勝手な想像ですが、小松も、このような効果を期待して設計をしたのではないと思います。

問題の22.5度の線を上にたどってゆくと、これらの線は、もとの正方形の辺を2等分する点からでていることがわかります。一方、正方形の上の頂点から出発した22.5度の線は、正方形の下側の辺にぶつかり、これらの辺を1対 $\sqrt{2}$ に分割します。

通常、22.5度の折り線で構成された作品では、1対 $\sqrt{2}$ の分割が基本になります。そうすることで、すべての分子が正方形の中に隙間なく埋め込まれるのです。しかし、この作品では、1対 $\sqrt{2}$ の分割と、それとはまったく異質な1対1の分割が、一つの正方形の中に共存しているのです。

そのことによる効果として、図2で網掛けで示した部分が小さな正方形の外側につけ加わったようになり、この部分が太い尾を可能にしているのです。

さて、ここで強調したいことは、こ

な2種類の分割を一つの正方形に共存させたことから生じさせたのでした。その結果として生じた網掛け部分の幅がリスの尾にちょうどよい幅であるということは、小松がこの効果を意図的にねらっていたのだとしても、僥倖というべきでしょう。

私が思うに、すべからず名作は、このような僥倖に恵まれています。もちろん、僥倖を逃さず、作品のかたち

に結実させるのは、创作者の能力にはかなりません。しかし、どんなにすぐれた创作者でも、僥倖がやってこなければ、名作を生むことはできないのではないのでしょうか。

これは、折り紙が制約を伴う芸術であるということと関係しています。もちろん、どんな芸術にもなんらかの制約はあります。例えば音楽にしても、ピアニストの指は10本しかありませんし、バイオリンの弦は4本しかありません。でも、これらの制約は、折り紙における不切正方一枚という制約とは比べものになりません。

設計法の発達によって、とりあえずかたちをつくるためだけなら、不切正方一枚は制約ではなくなりました。しかし、名作をつくらうと思ったら、あいかわらず不切正方一枚は制約であり続けています。

このような制約のもとで創作をするとき、创作者は、創造神の如くふるまうことはできません。折り紙では、あくまで紙が神なのであって、紙の神の微笑みを受けた作品だけが名作となりうるのです。

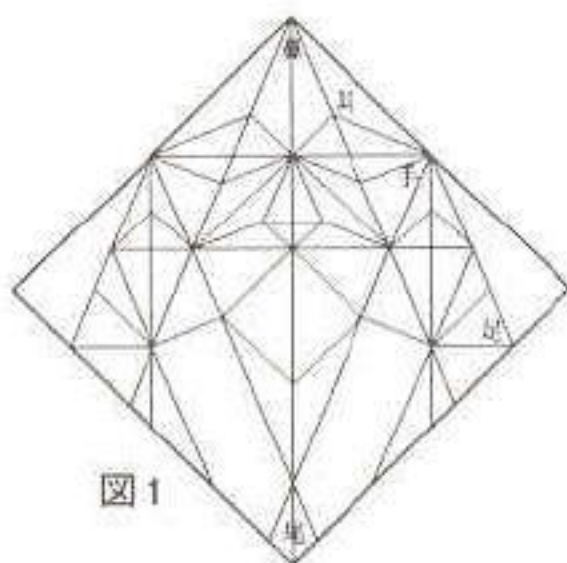


図1

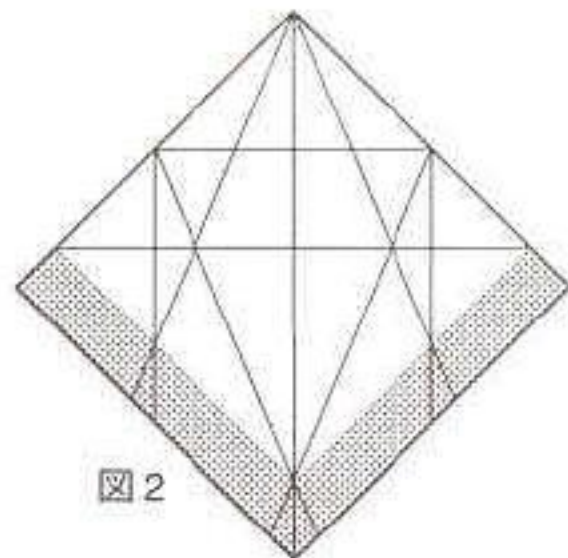


図2



小松英夫
「リス」

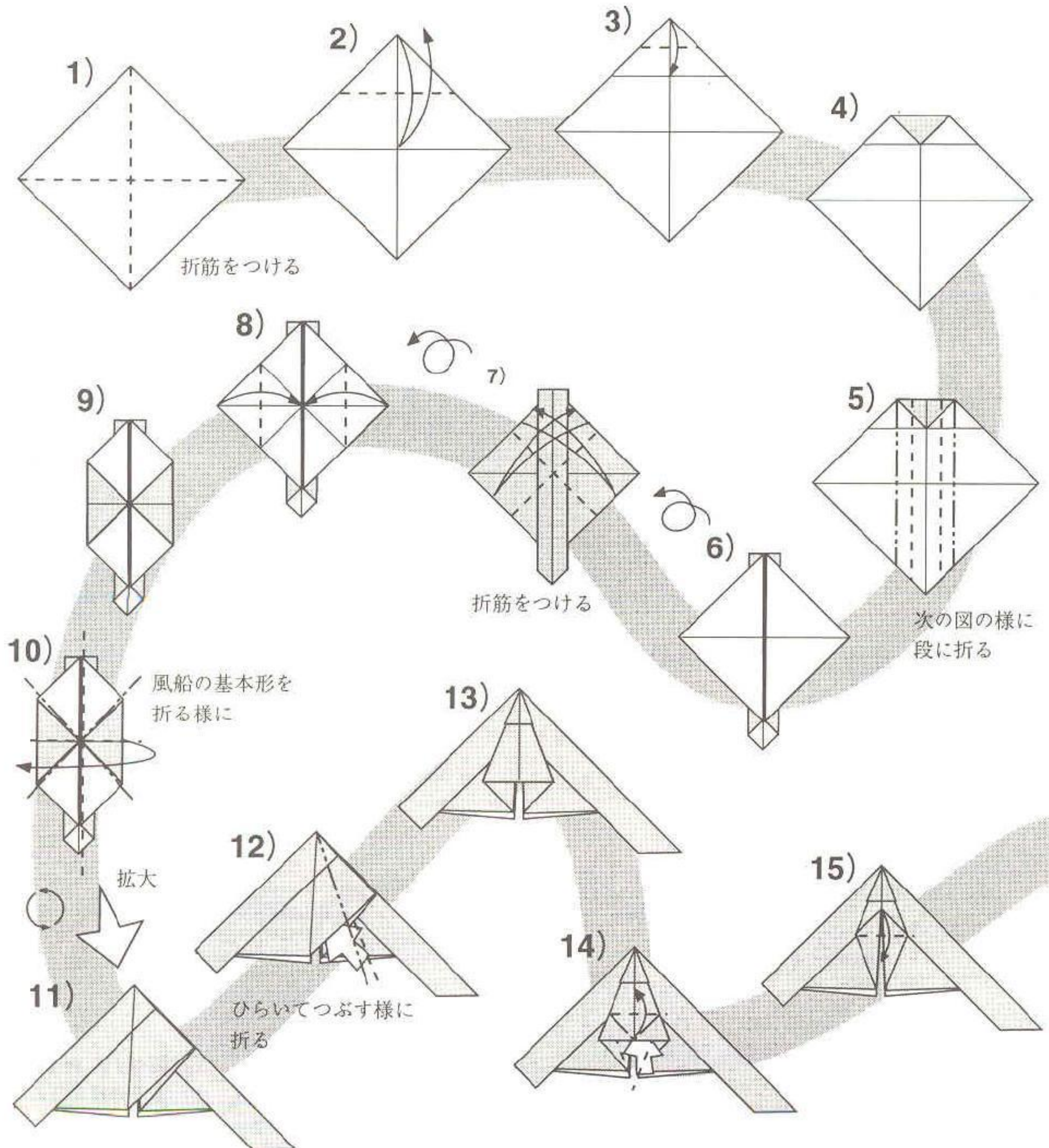
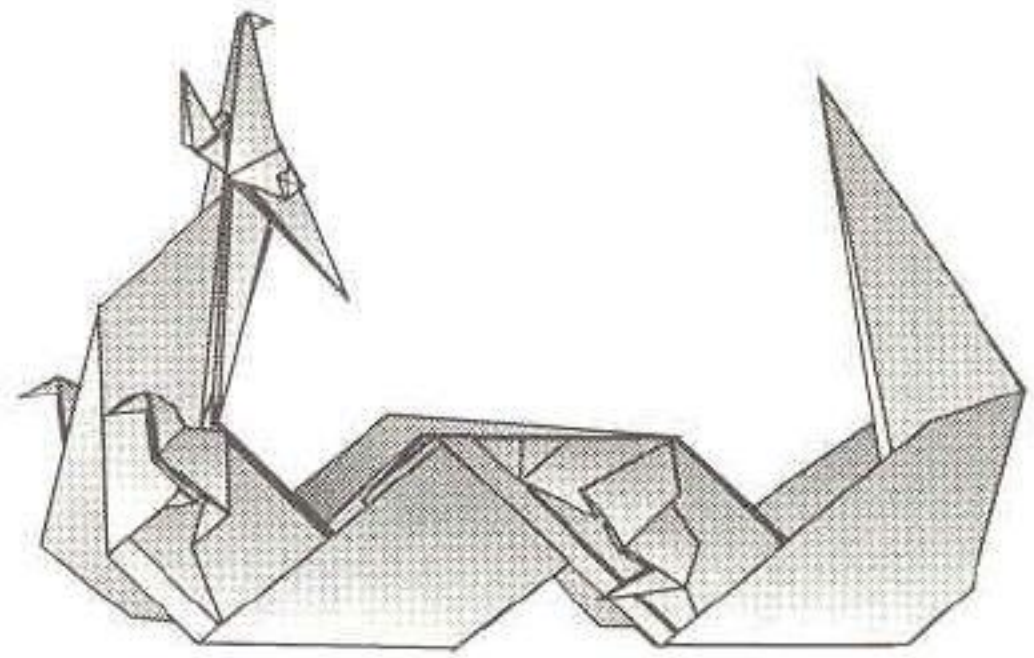
折紙探偵団
第3回コンベンション折り図集

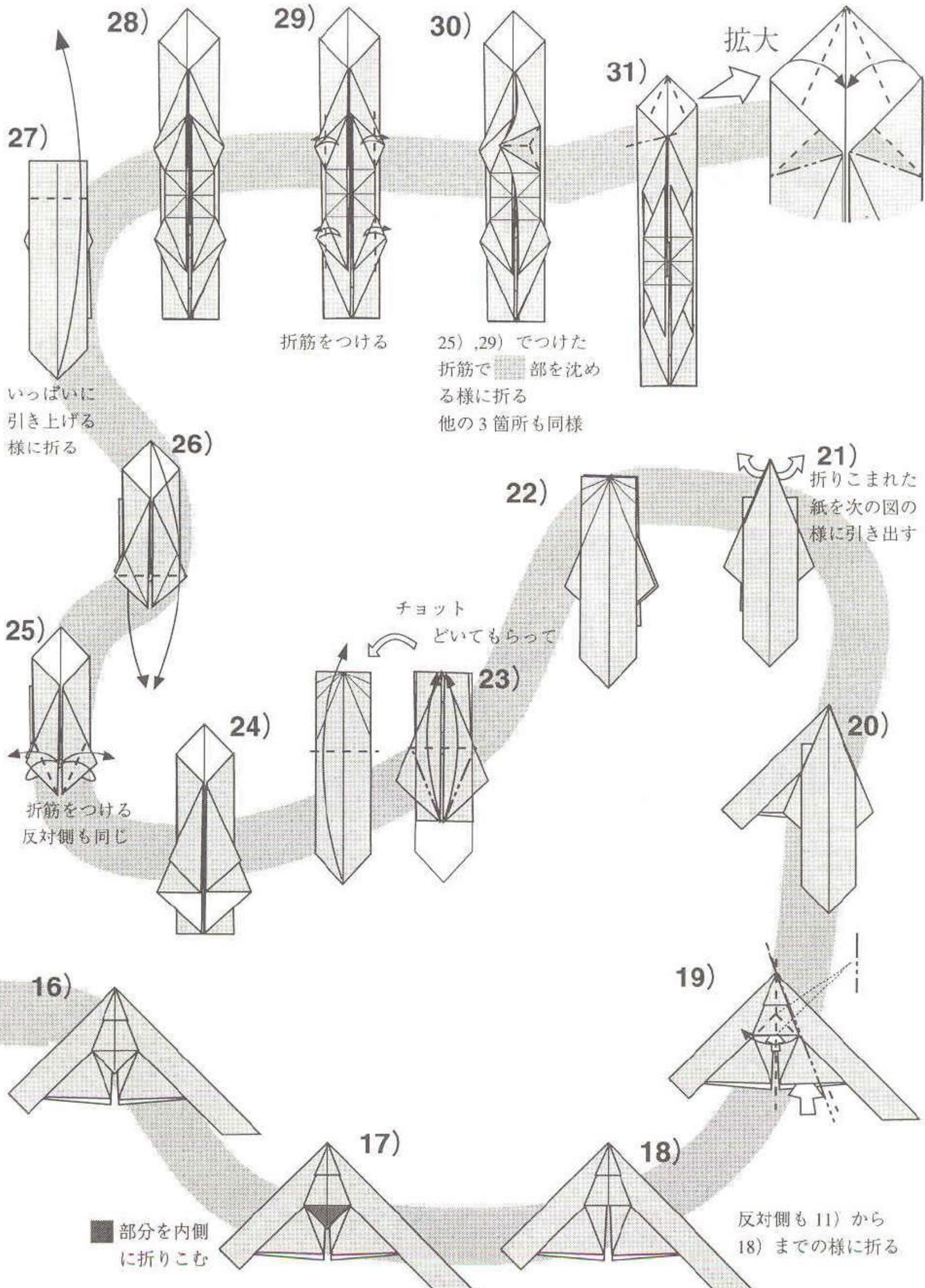
の網掛け部分の正方形全体に対する割合が、この作品の尾をつくるのにちょうどいい割合になっているということです。この部分がもう少し長くても、もう少し短くても、この作品はバランスを失ってしまうでしょう。

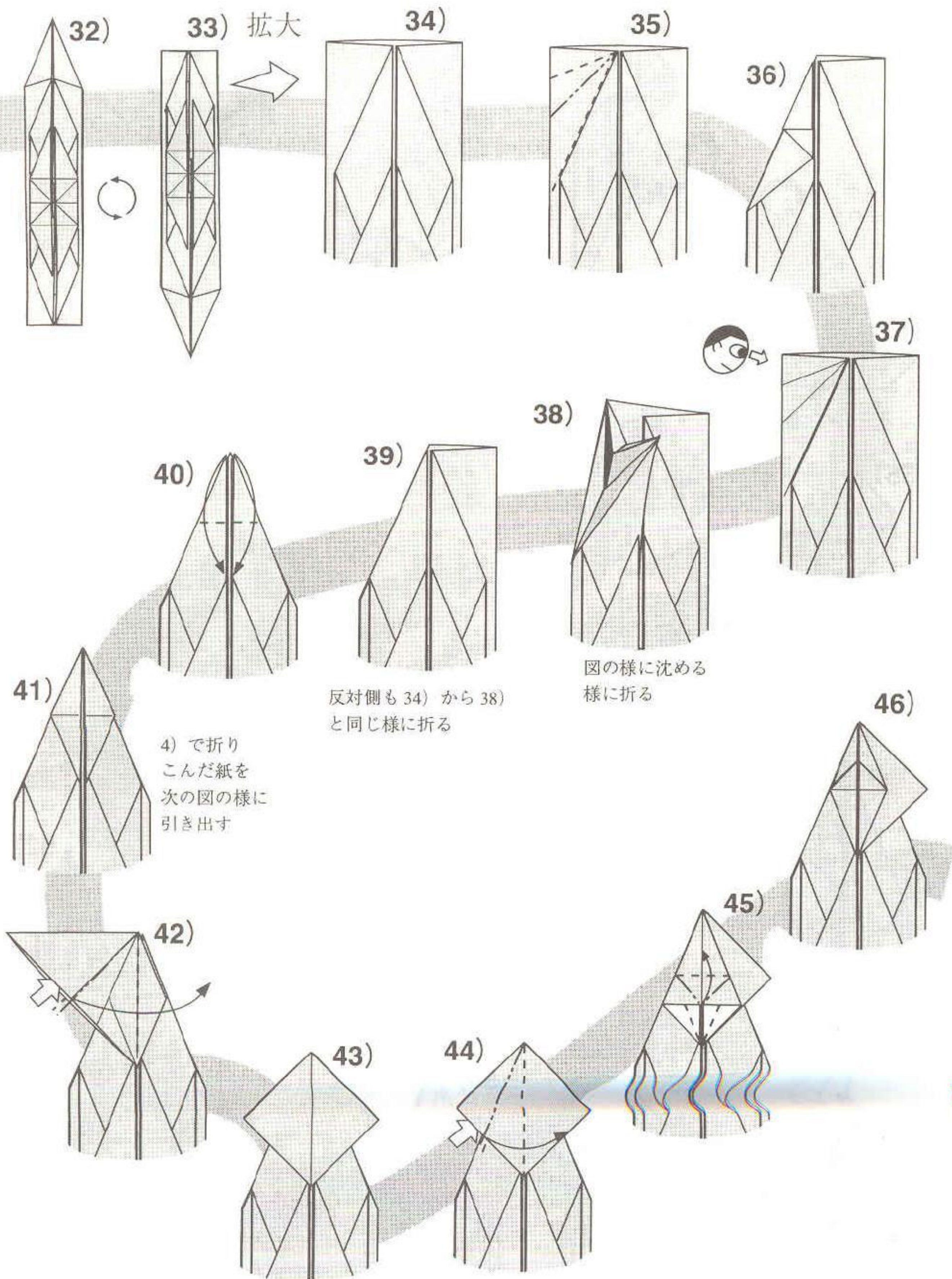
この割合は、1対1と1対 $\sqrt{2}$ という、折り紙におけるもっとも基本的

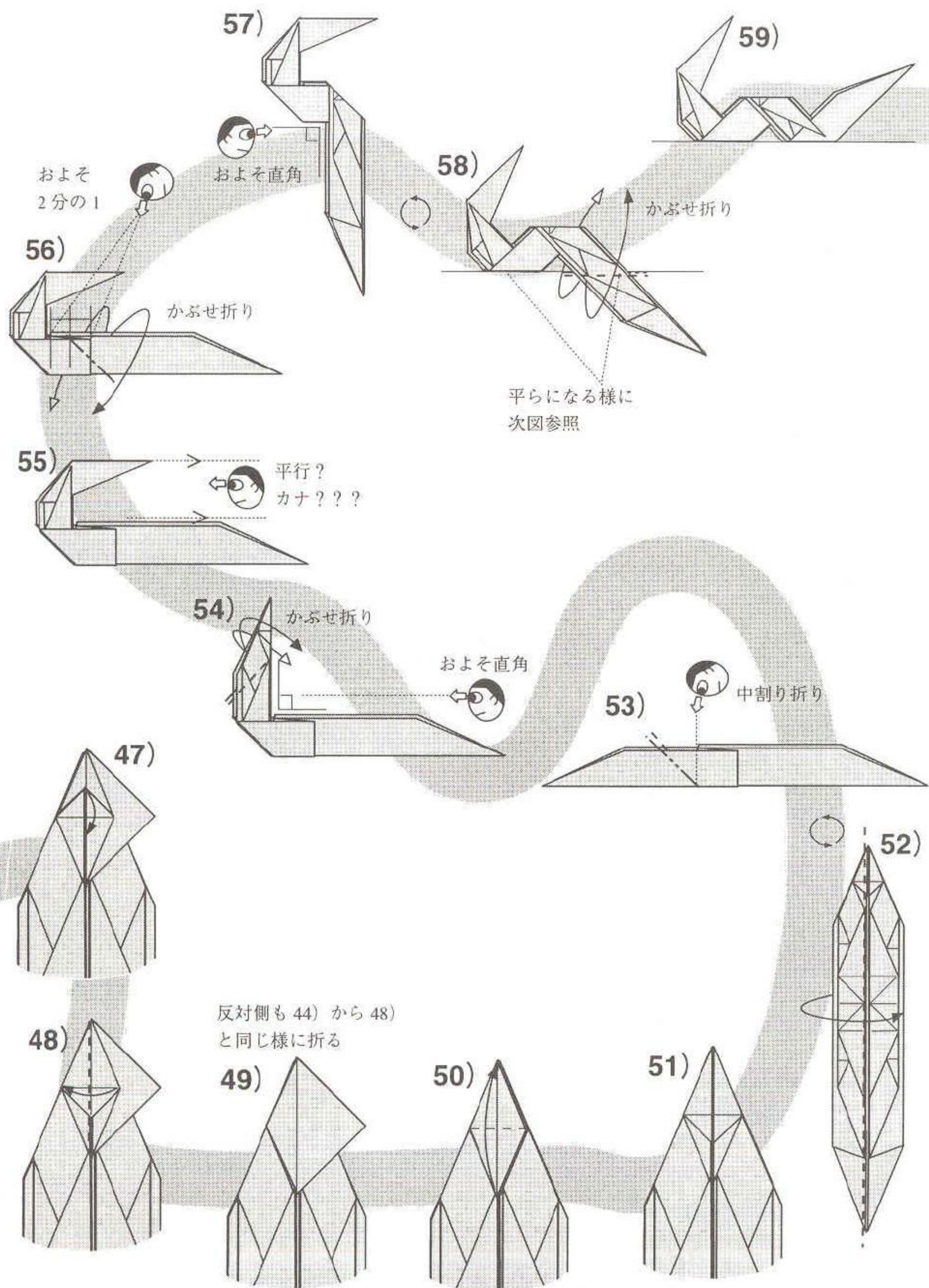
龍

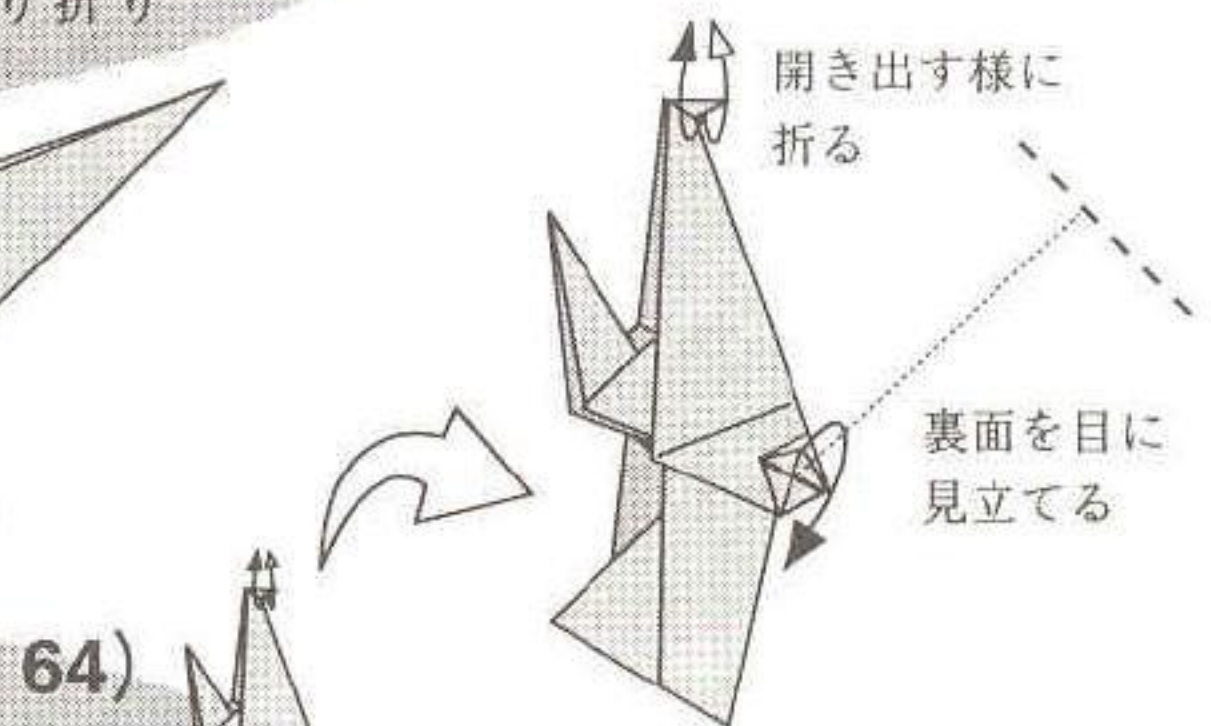
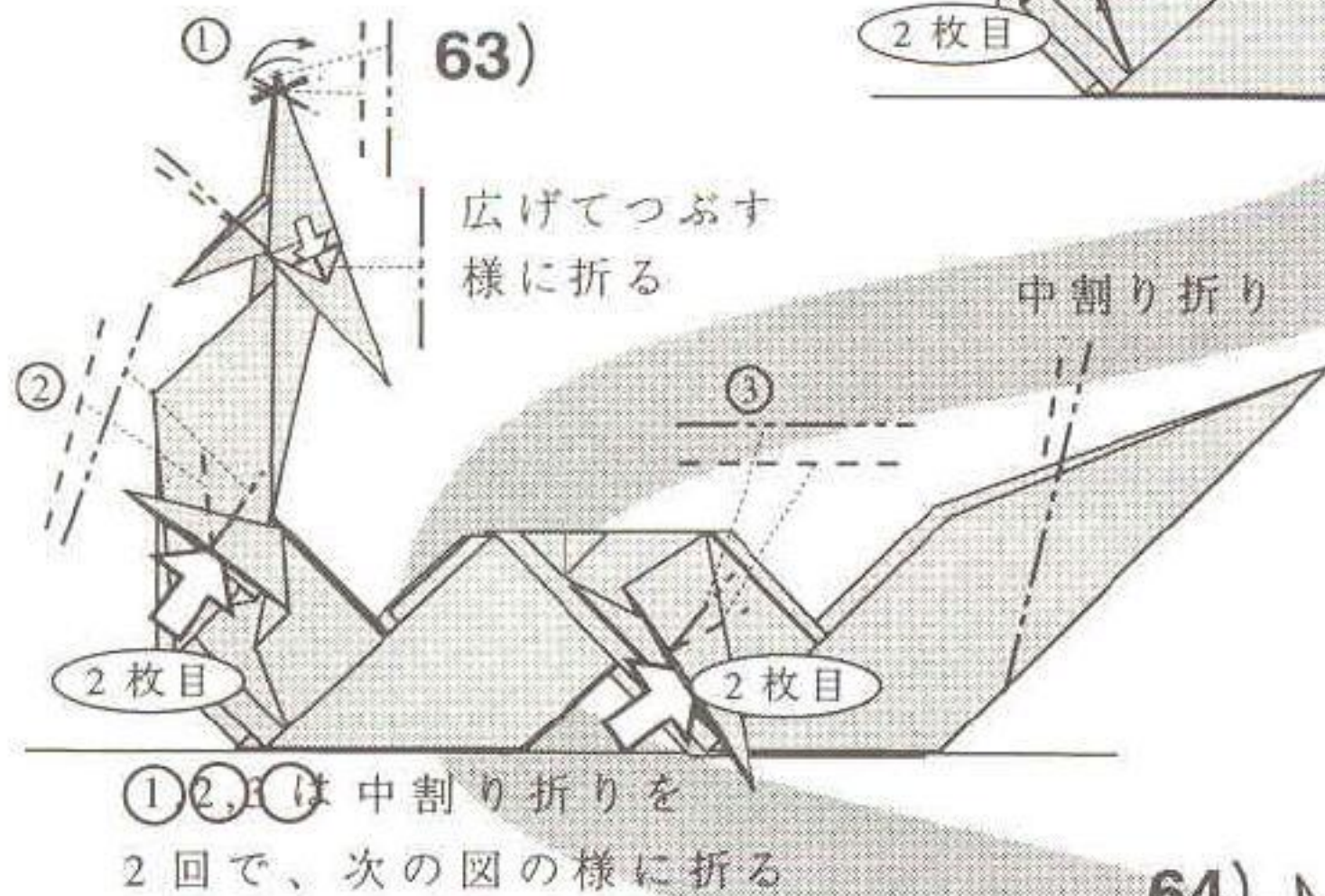
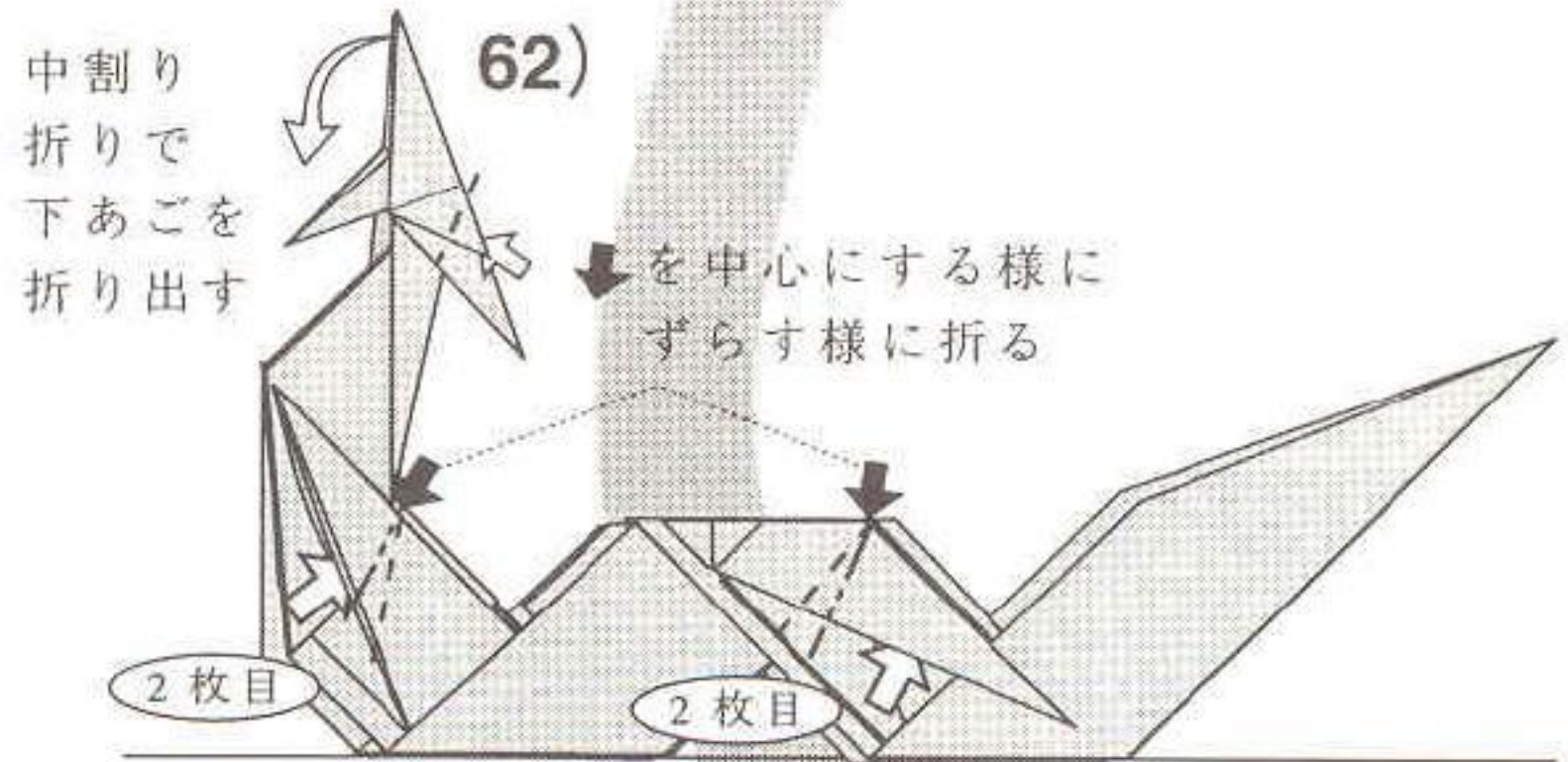
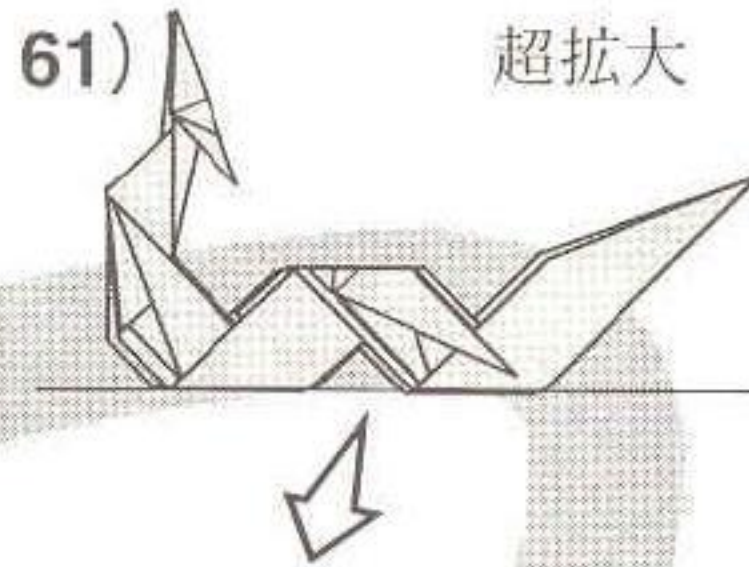
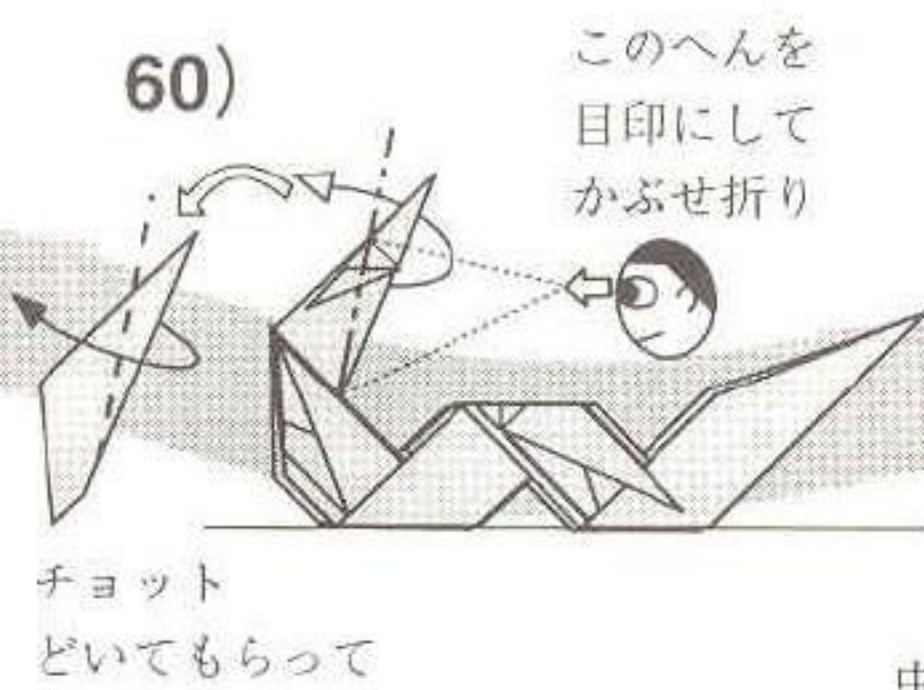
作・画
小笹 径一



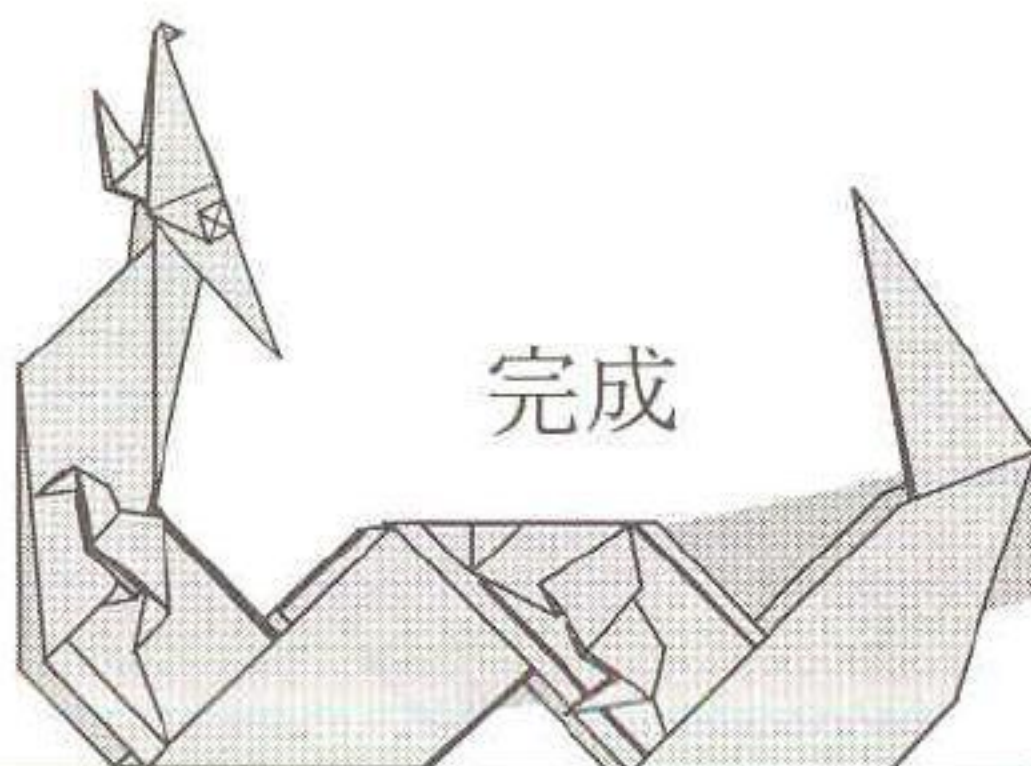








反対側も
62) から 64)
と同じ様に折る



全体の感じを見ながらの
ほうが、良いと思いまし
て、こんなふうに描いて
見ましたが、かえってゴ
チャ、ゴチャ、、、カナ、

ゴホンヅノカブト

2回連載＝後編

川畑文昭

By Fumiaki Kawahata

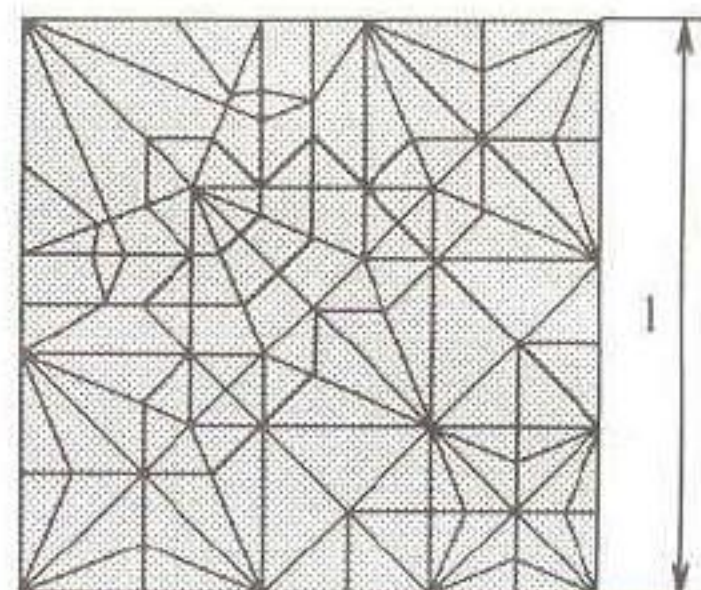
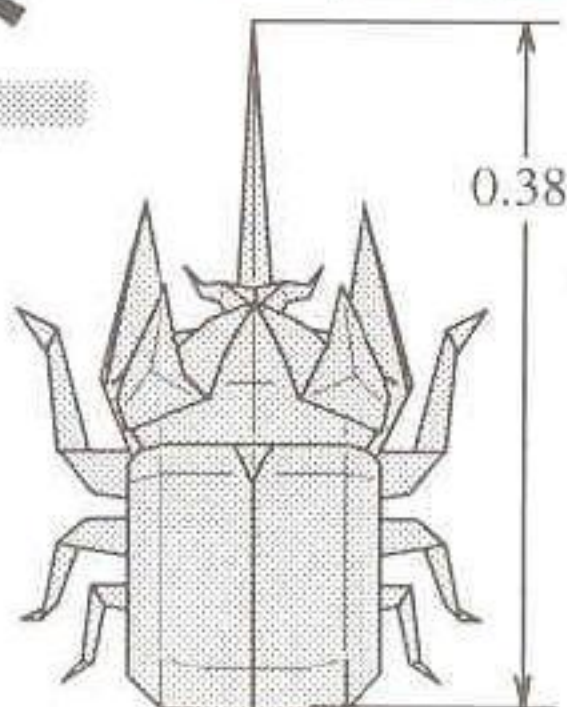
1998/5/16

体長 約70mm

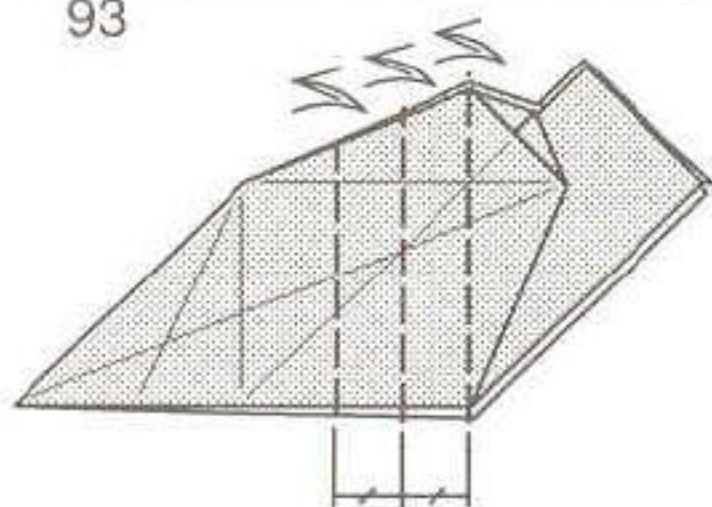
インドシナ半島、マレー半島

原寸大製作の場合

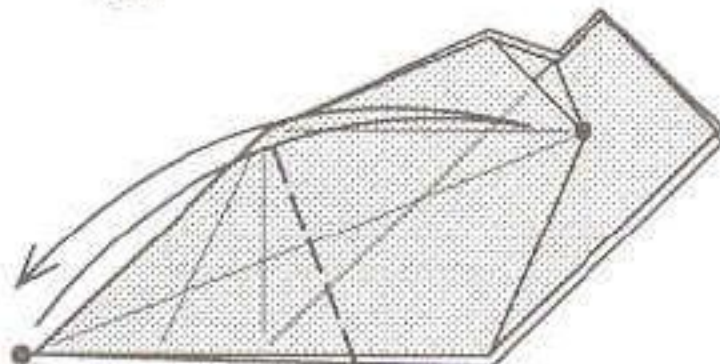
18.5cmのホイル紙がお勧め



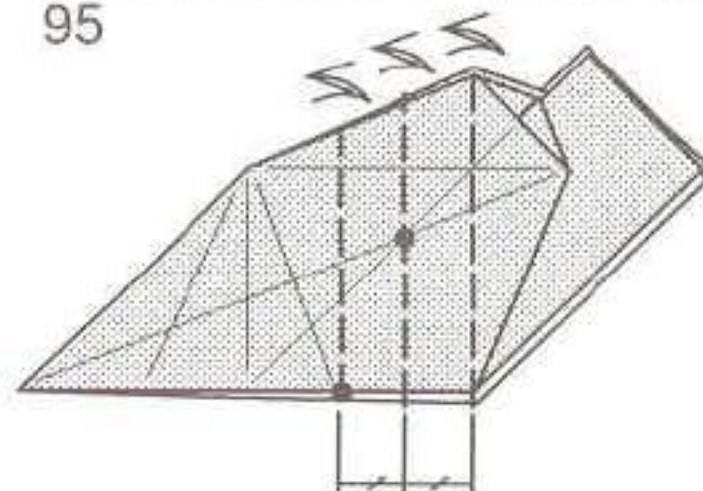
93



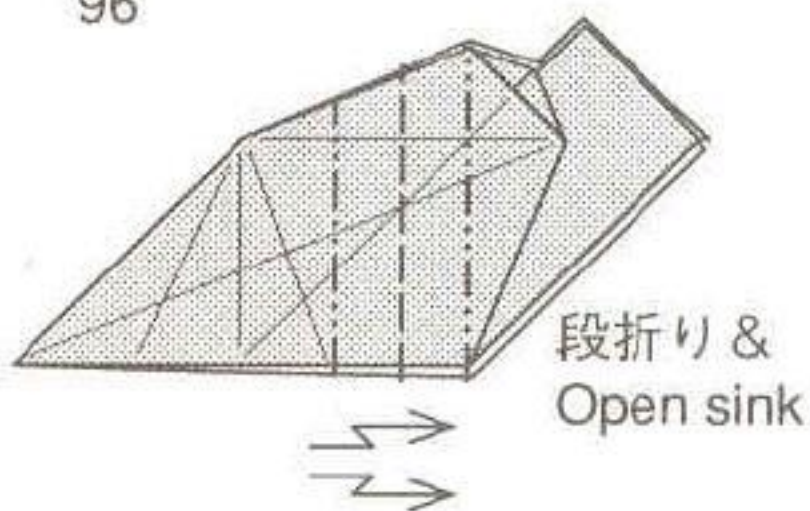
94



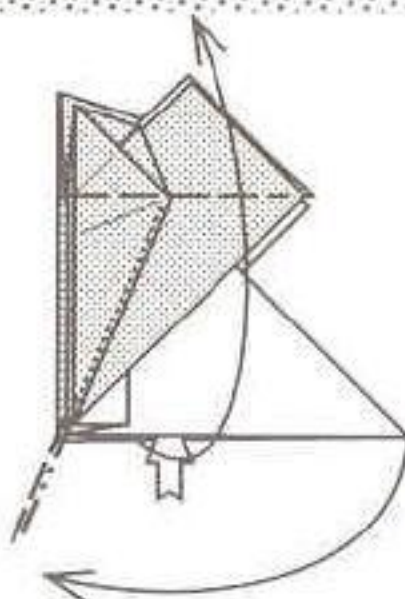
95



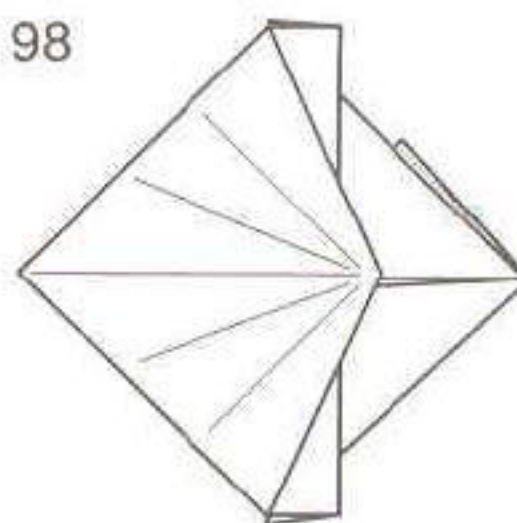
96



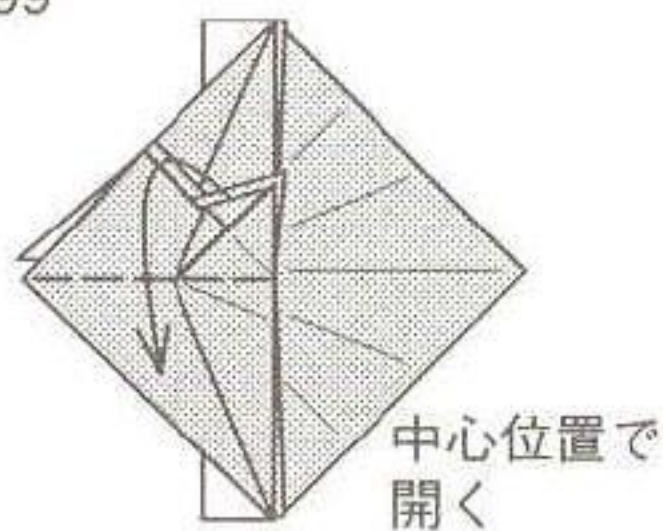
97



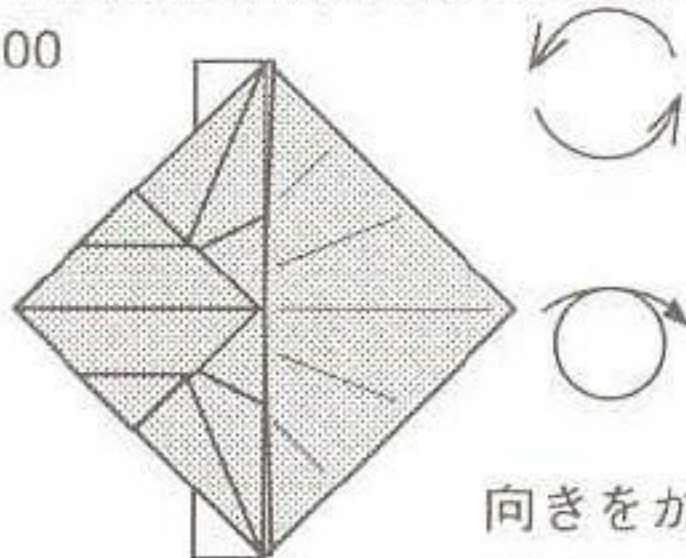
98



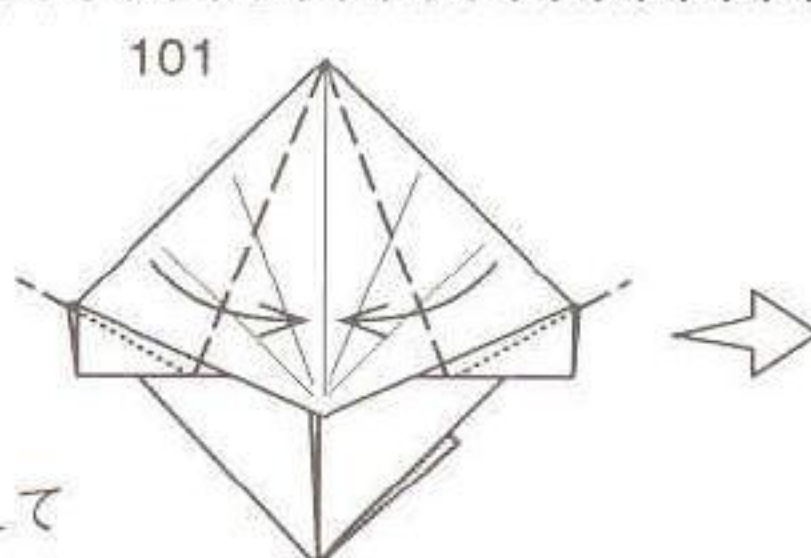
99



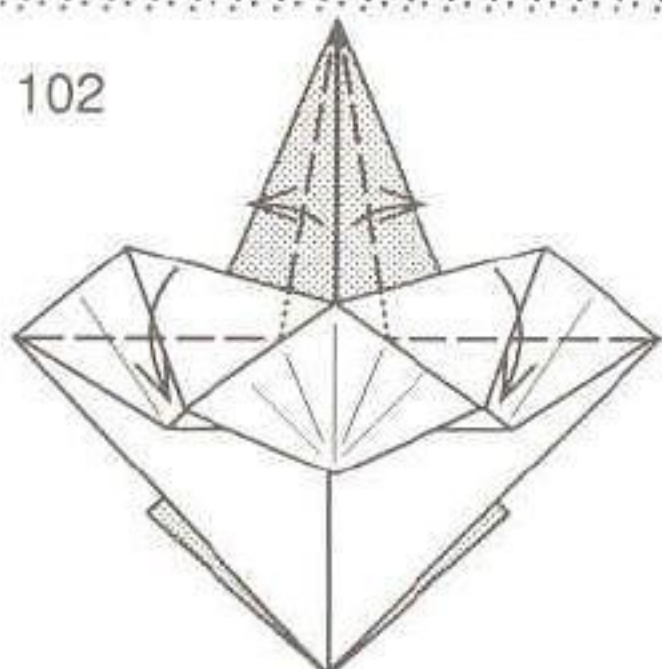
100



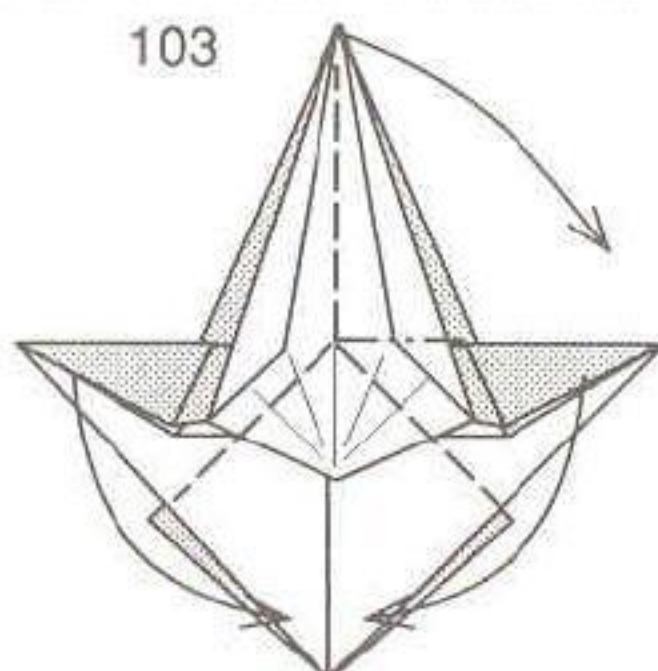
101



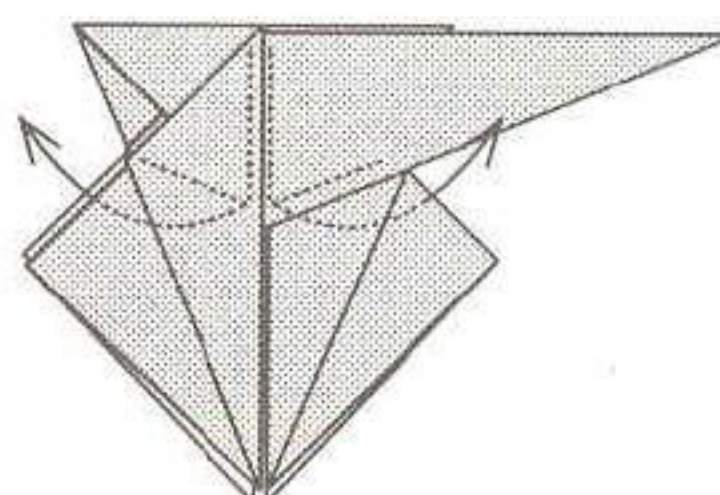
102



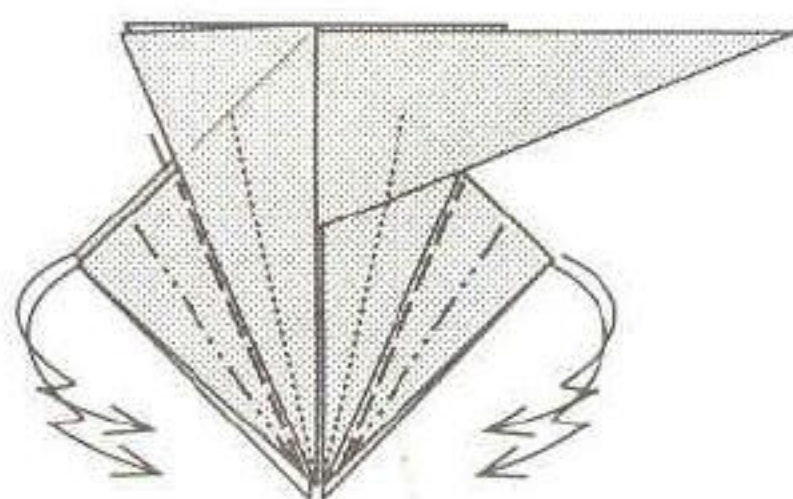
103



104

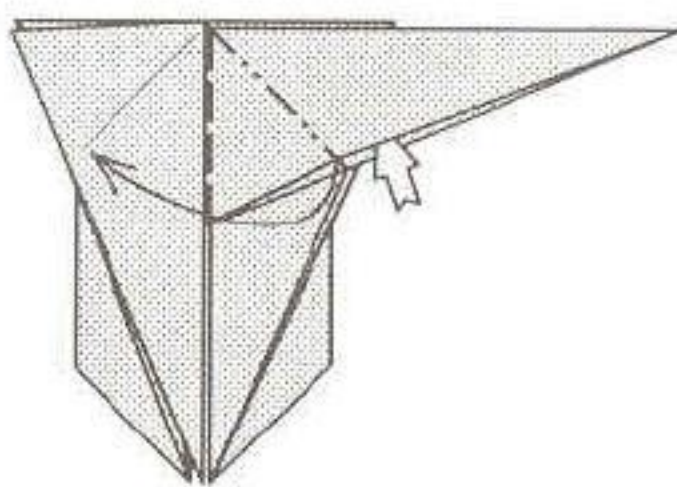


105



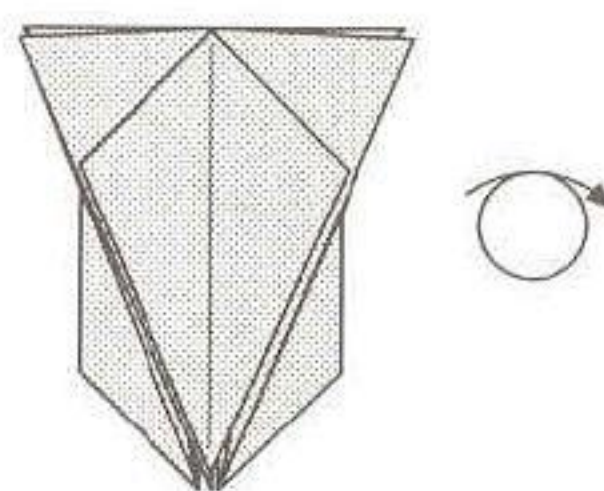
ついている折りすじで
2段になかわり折り

106

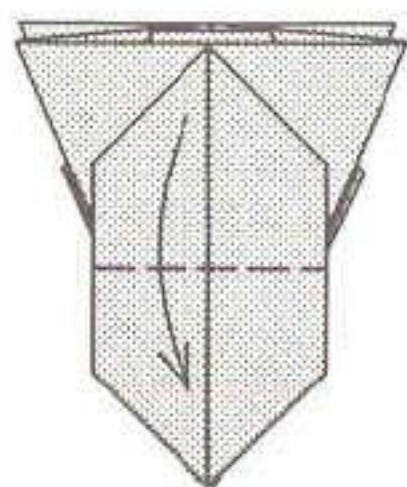


ひろげてつぶす

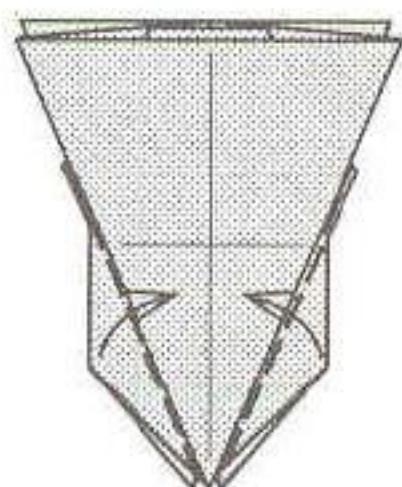
107



108

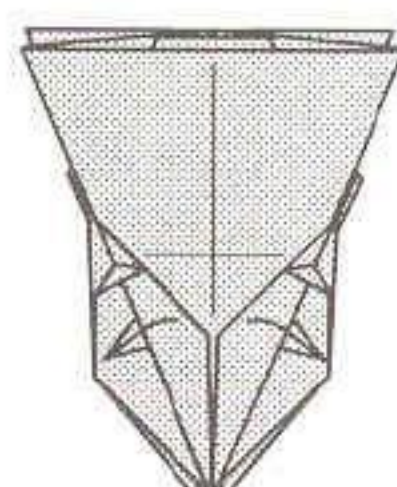


109

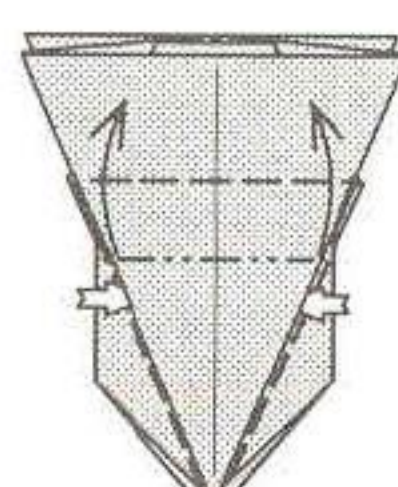


上の一枚を折る

110

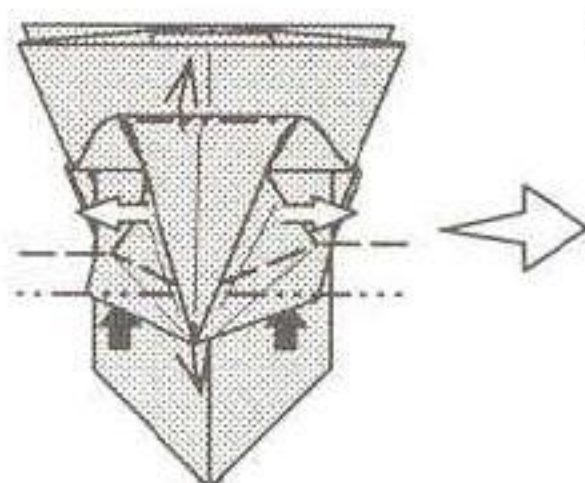


111



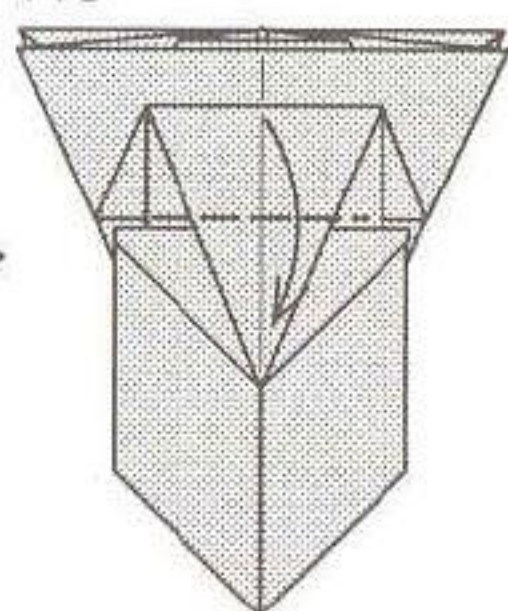
上の一枚をふくらませる
ように立体的に折る

112

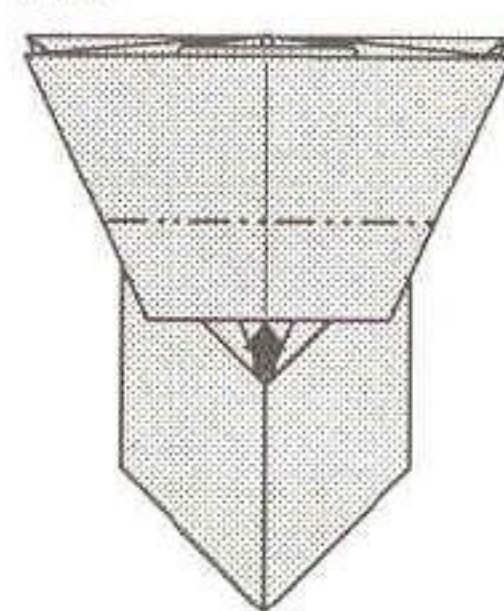


途中図

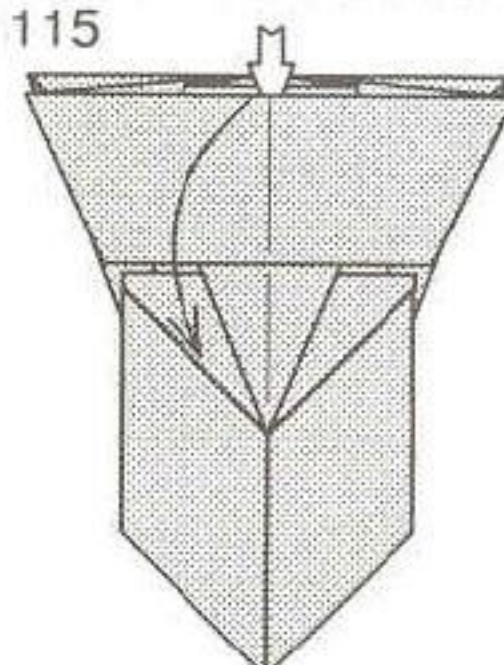
113



114

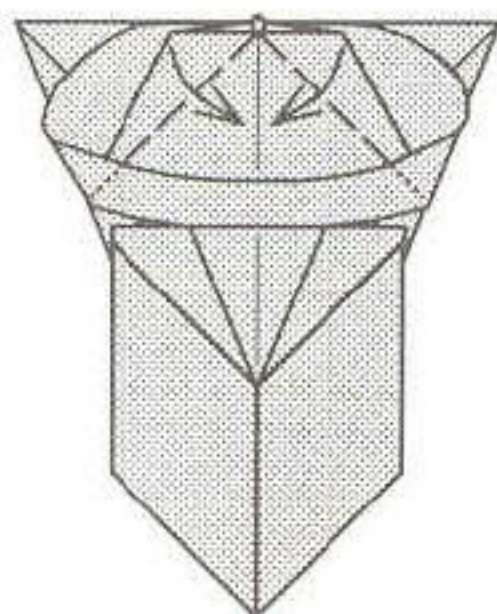


115

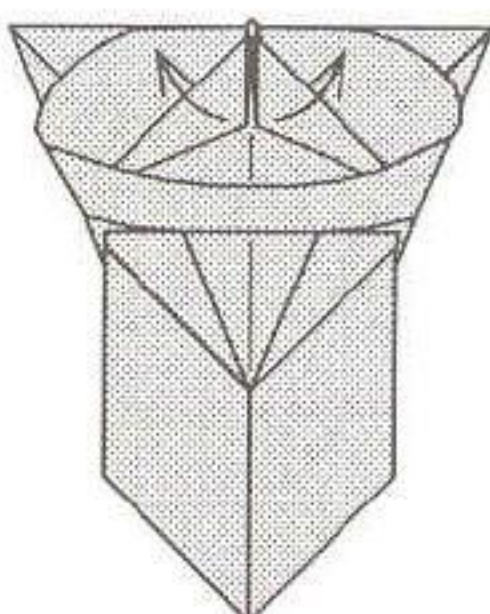


広げて内側を見る

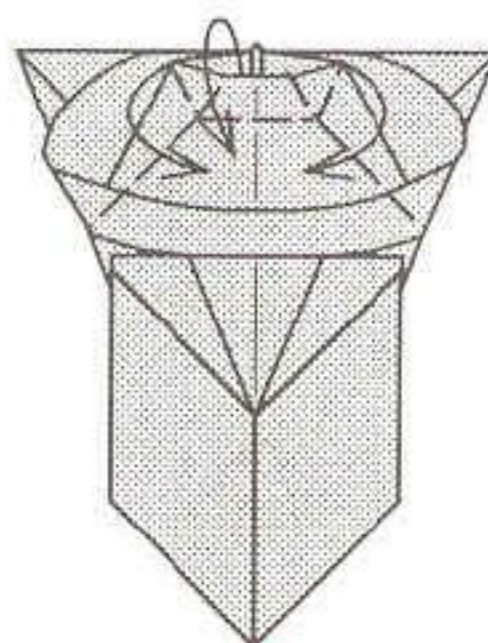
116



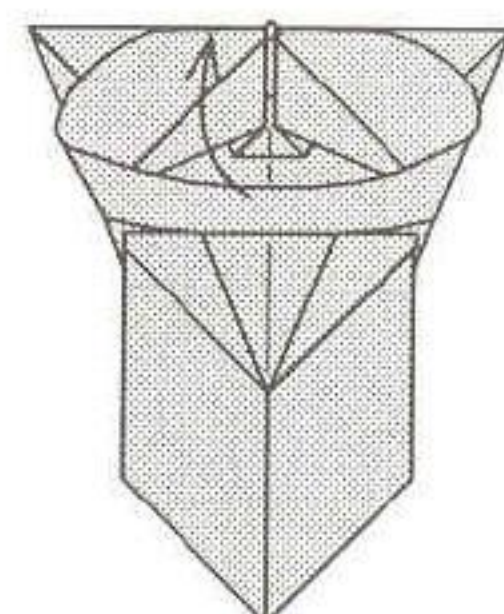
117



118

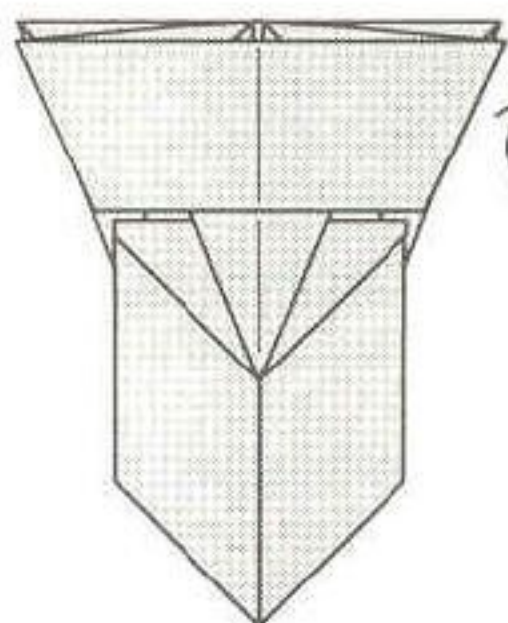


119

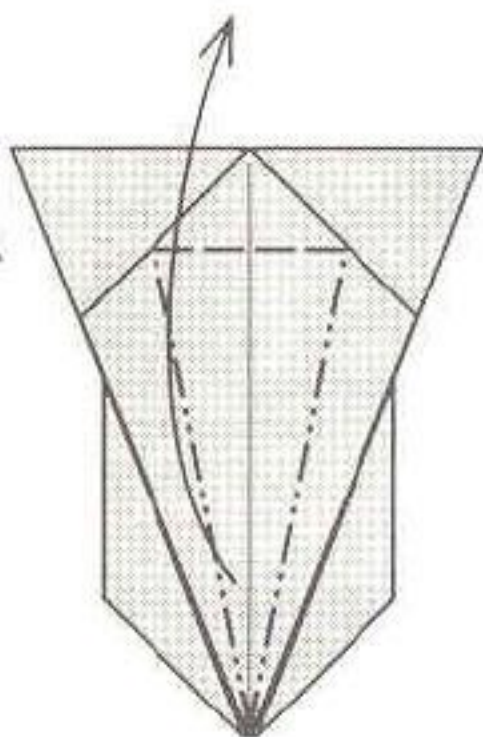


広げた所を元に戻す

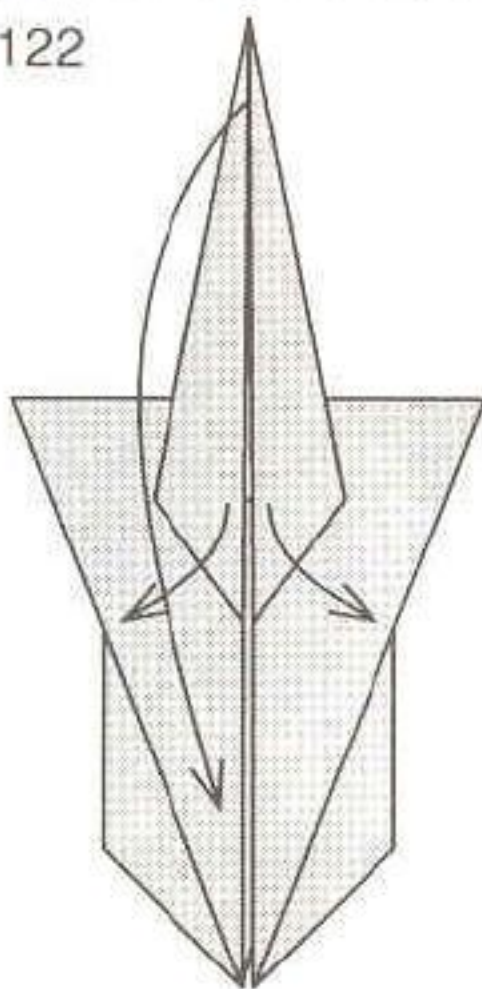
120



121

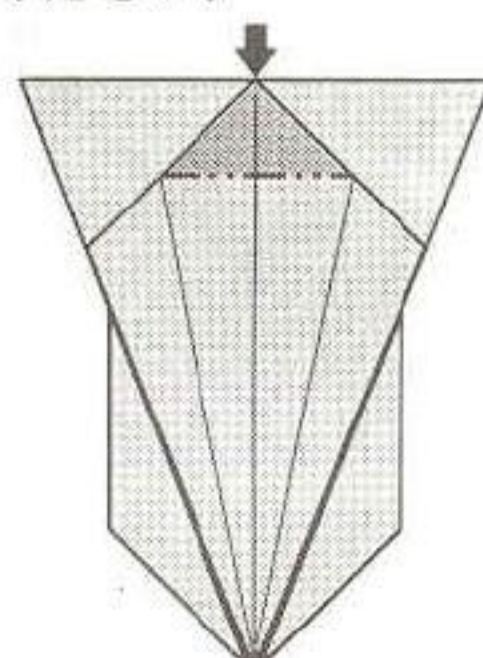


122

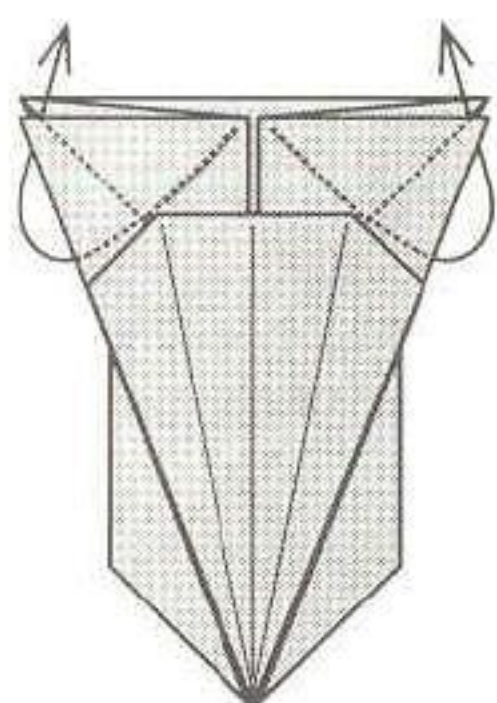


123

沈め折り (Open sink)
(難しいですが、全体を
ほぐしながら折って
ください)

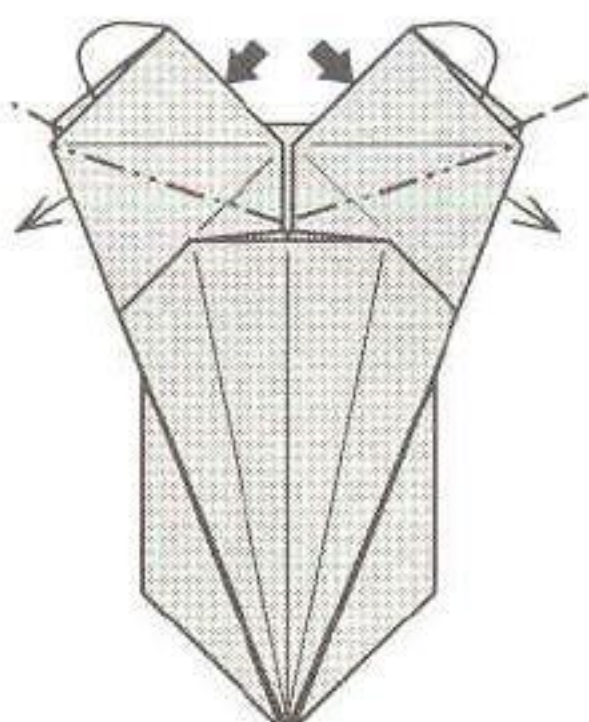


124



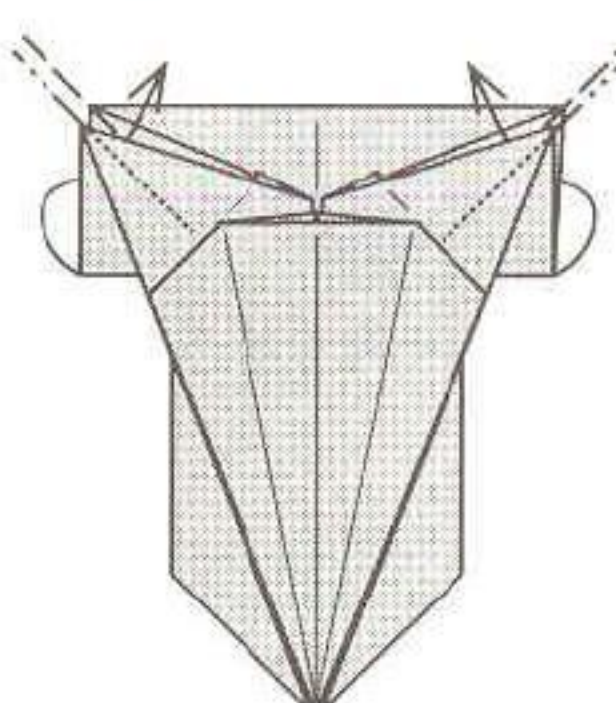
両側の内側のカドを
上に折り出す

125



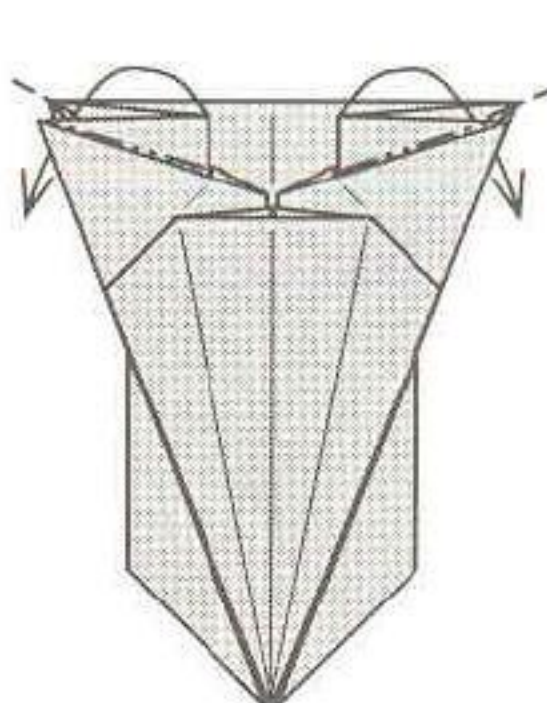
なかわり折り &
沈め折りの複合わざ

126



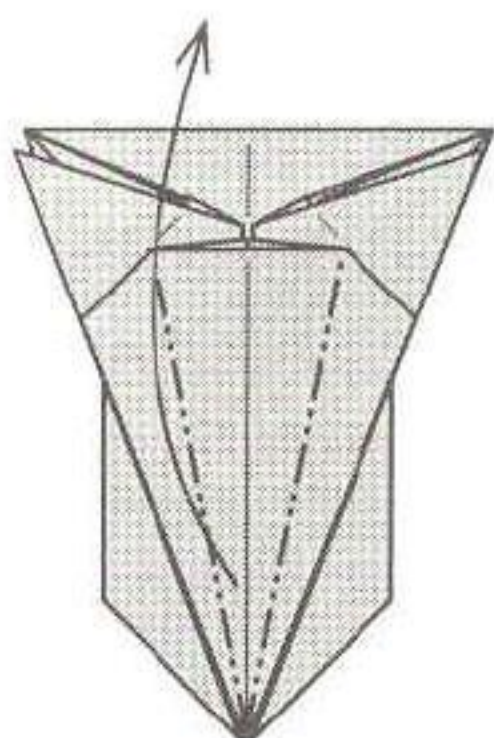
なかわり折り

127

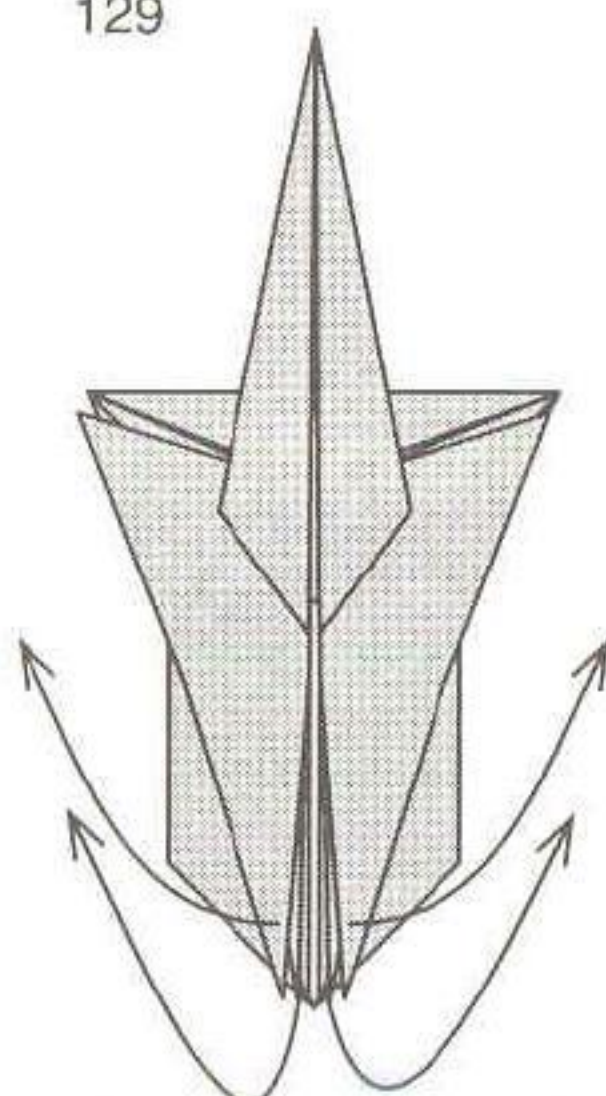


なかわり折り

128

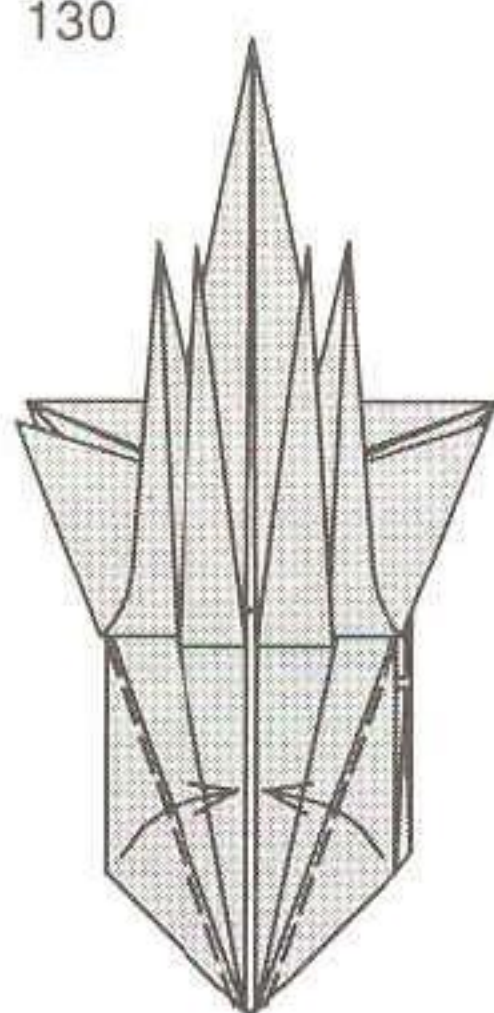


129



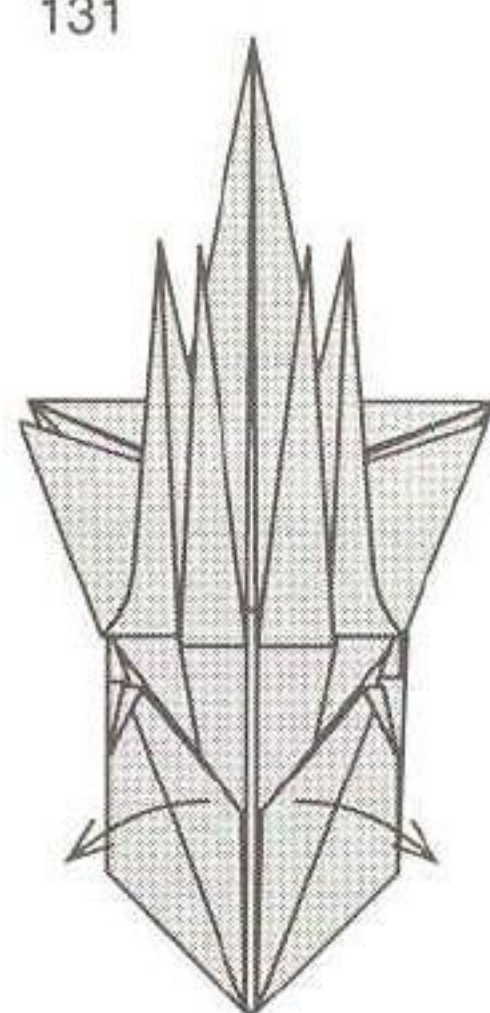
4本のカドを上にあげる

130

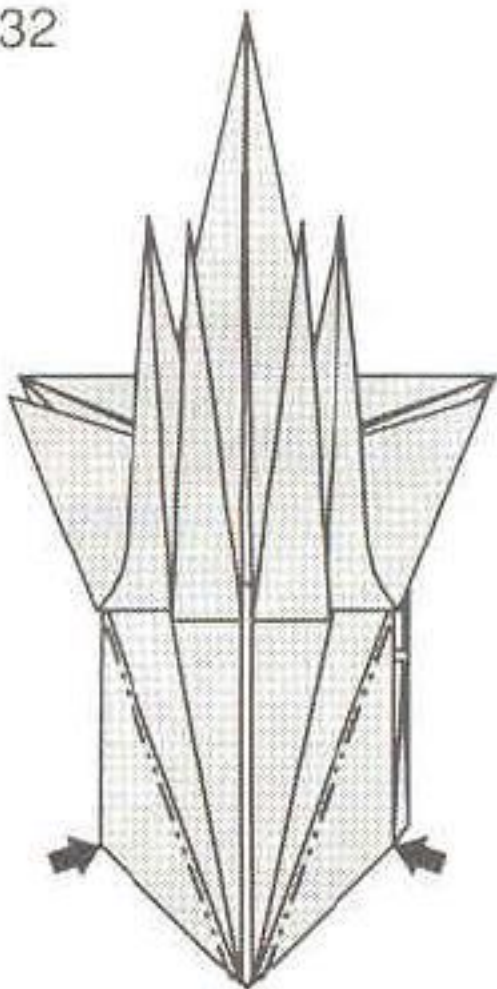


上にある一枚を折る

131

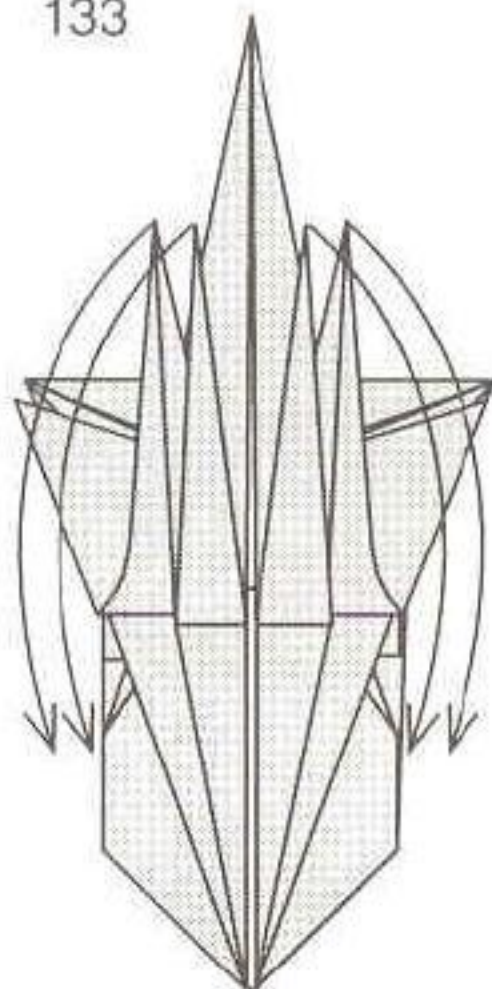


132

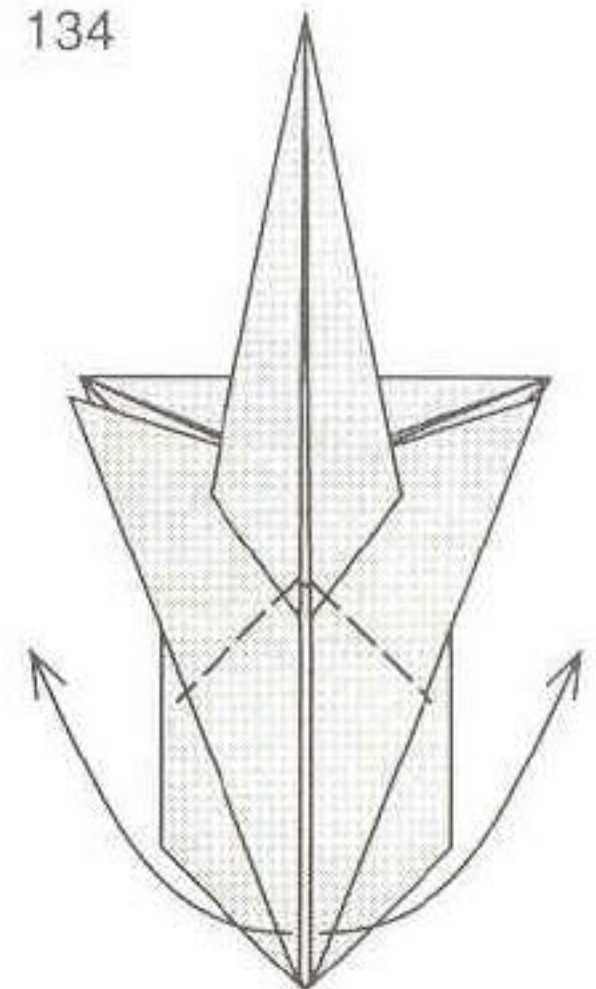


沈め折り (Open Sink)

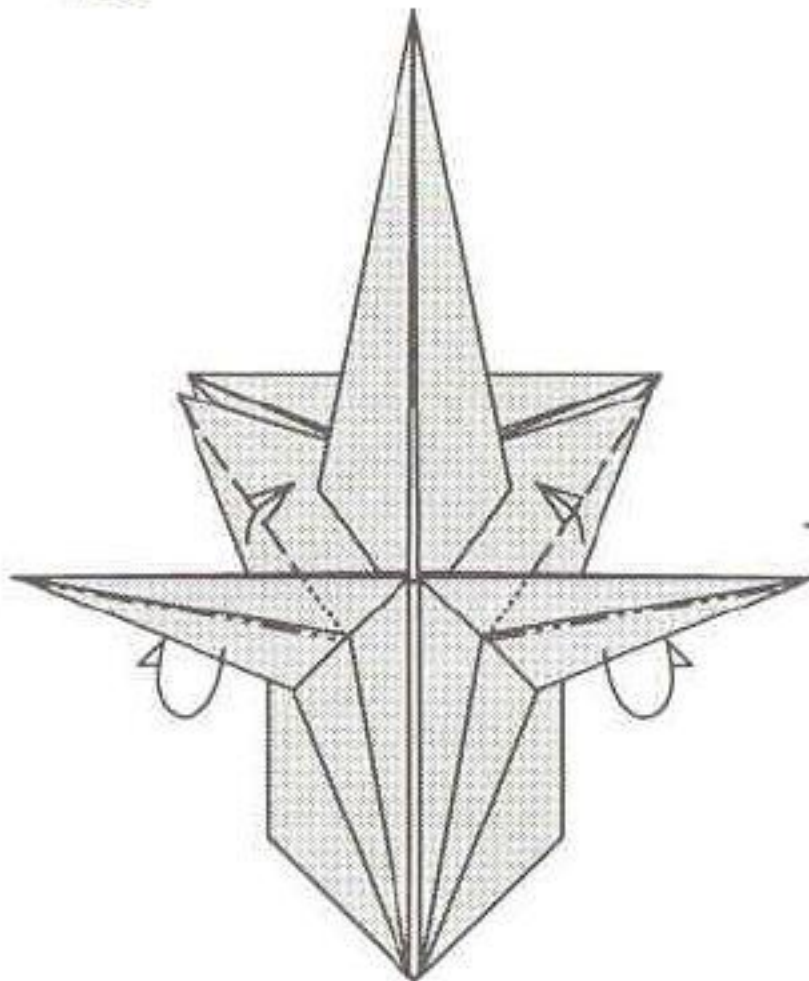
133



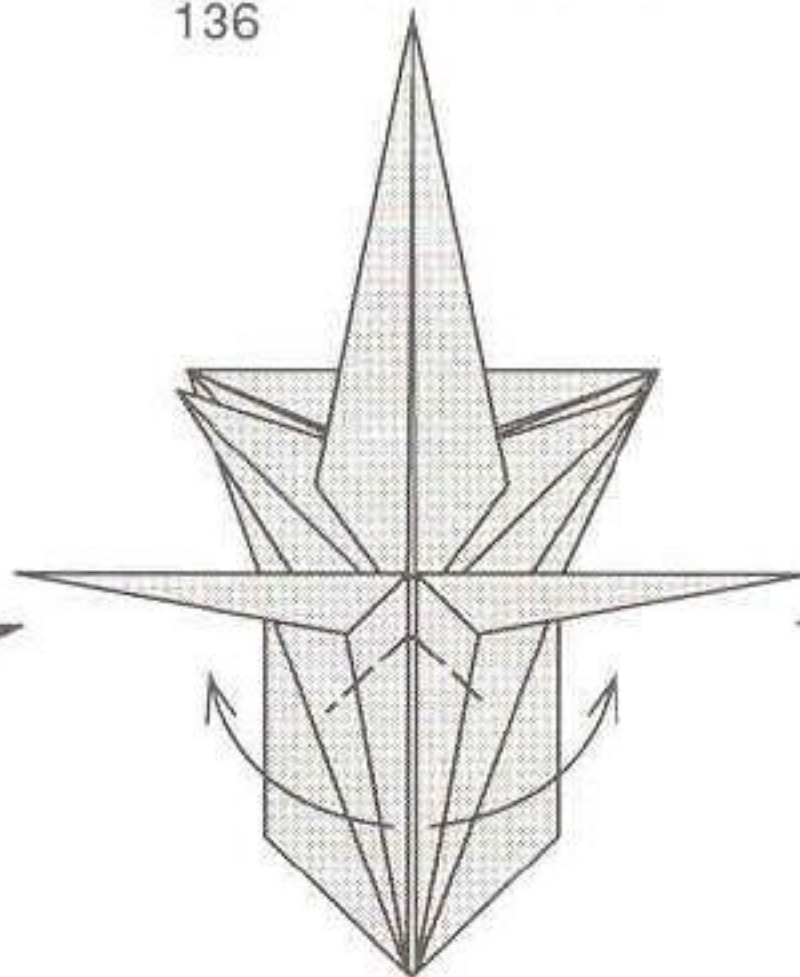
134



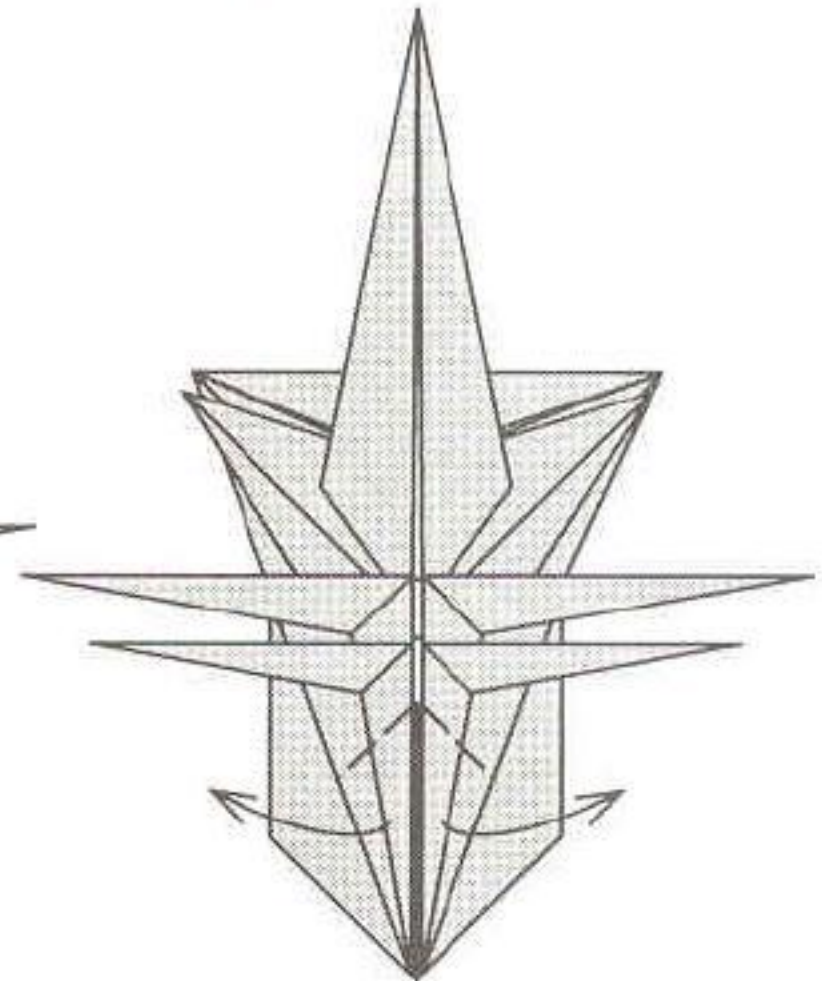
135



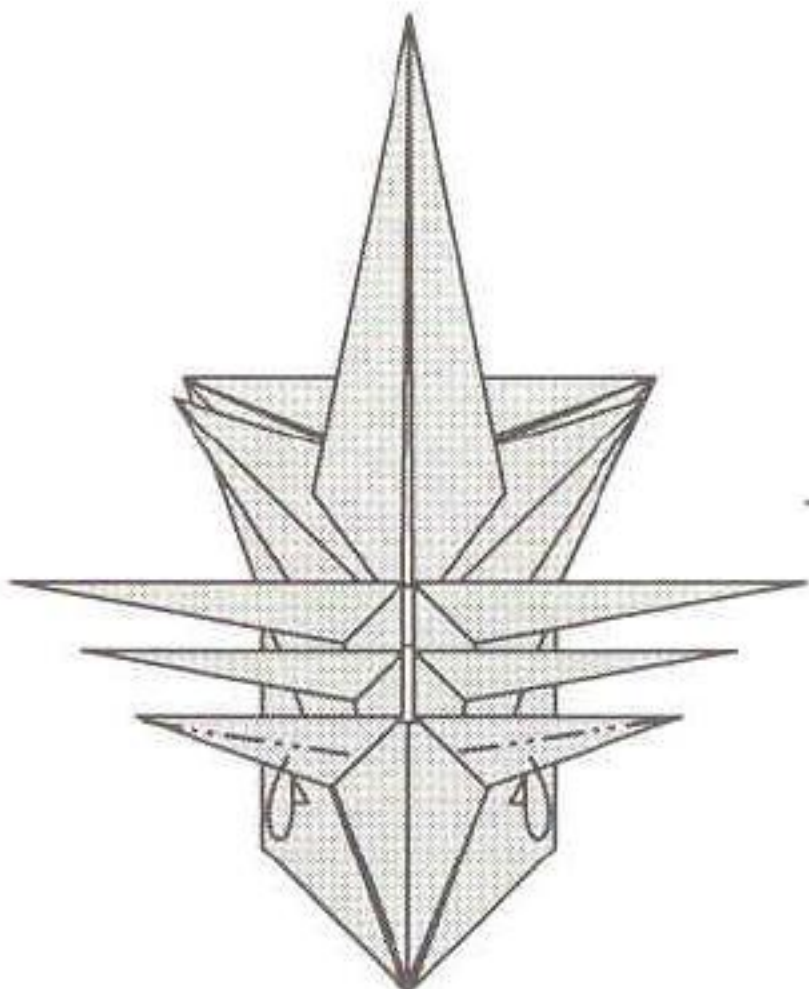
136



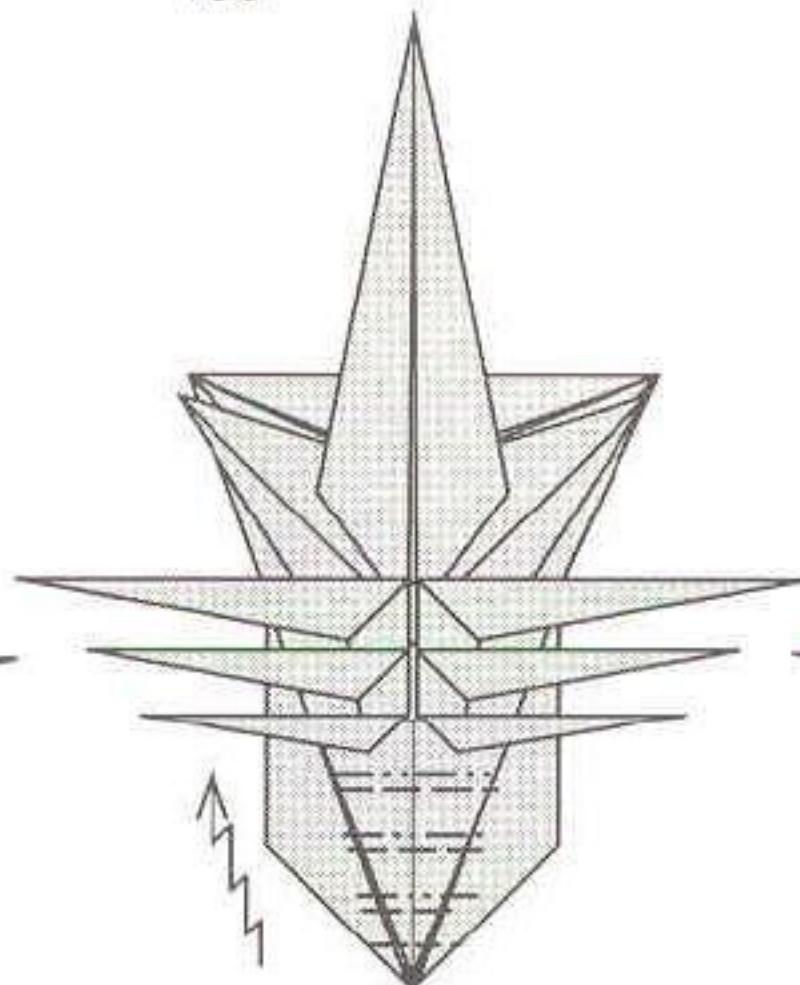
137



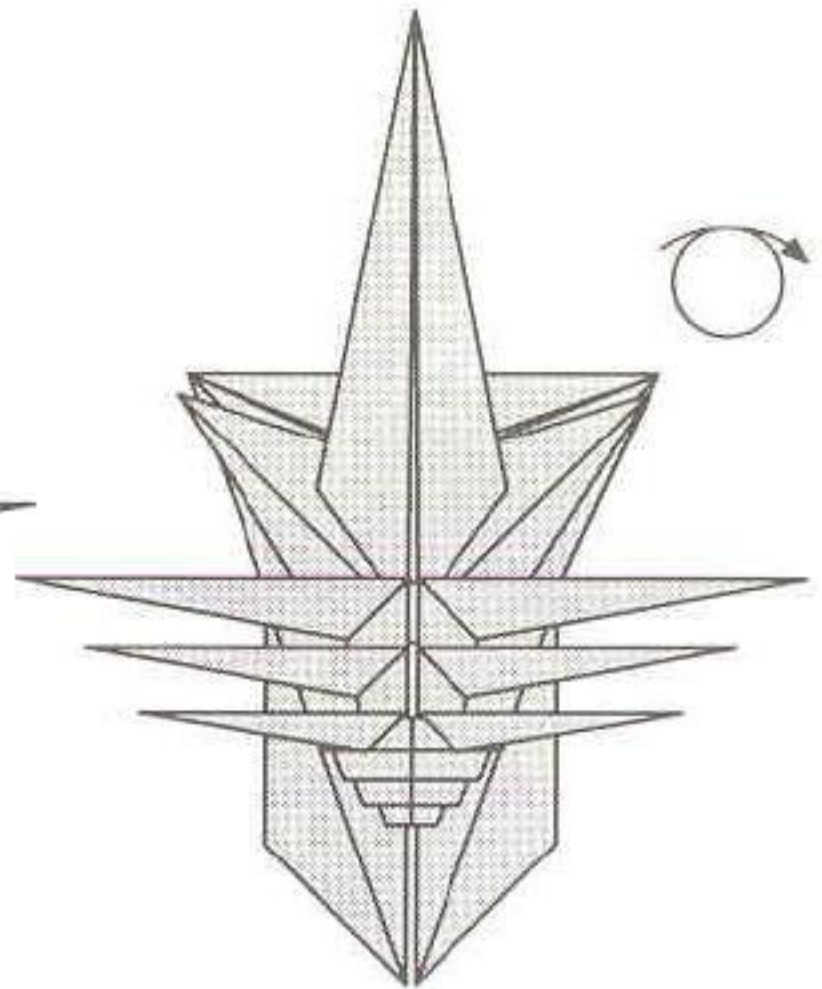
138



139



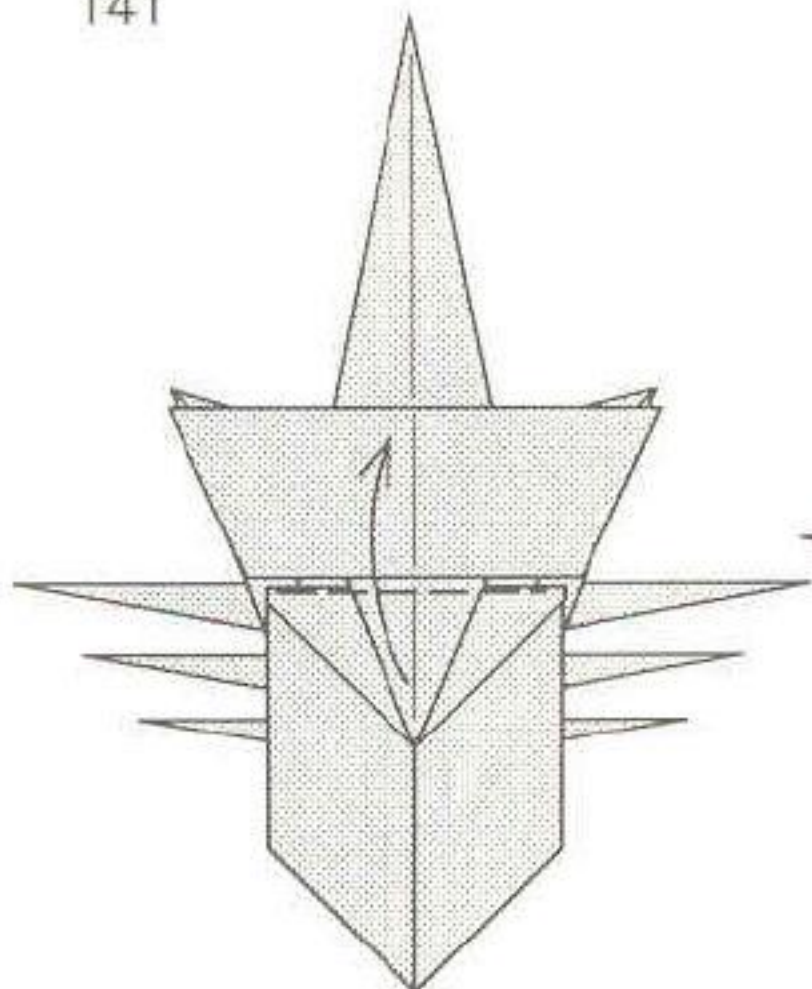
140



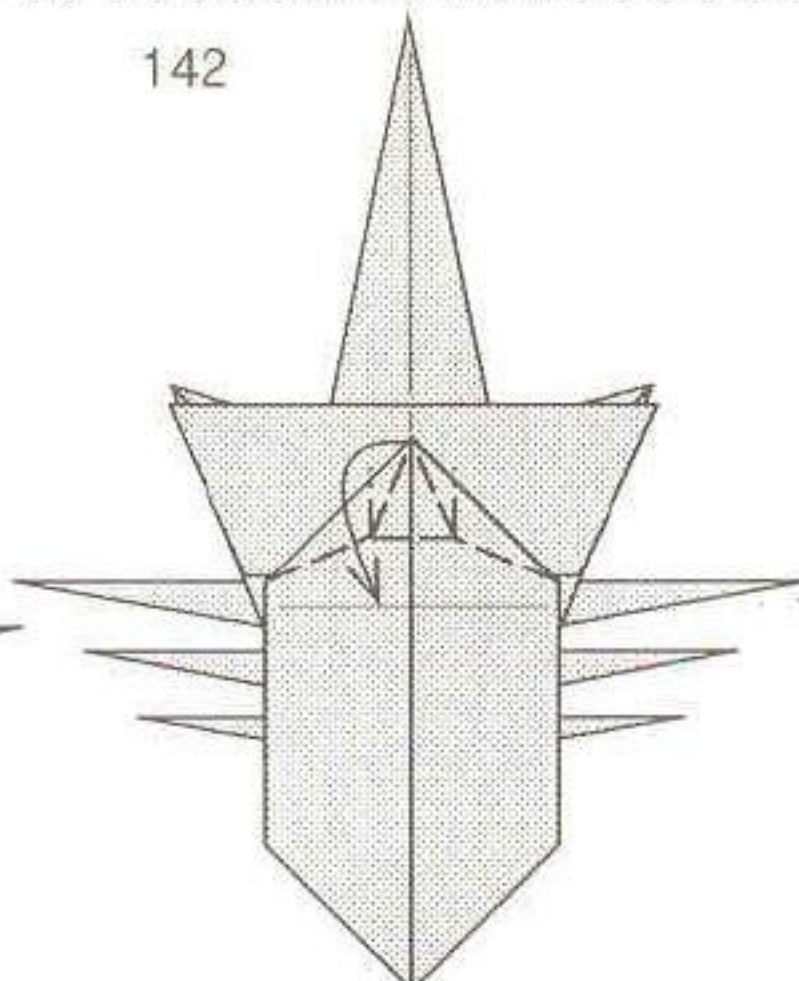
足をなかわり折りで細く

段折りでお腹をつくる

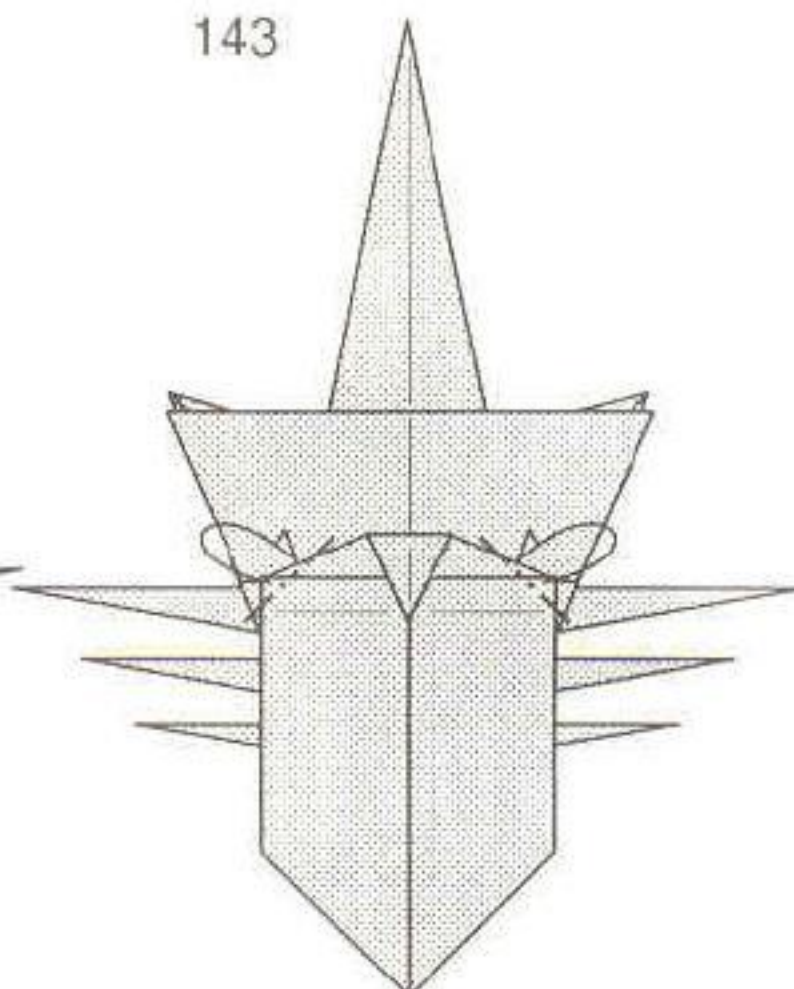
141



142

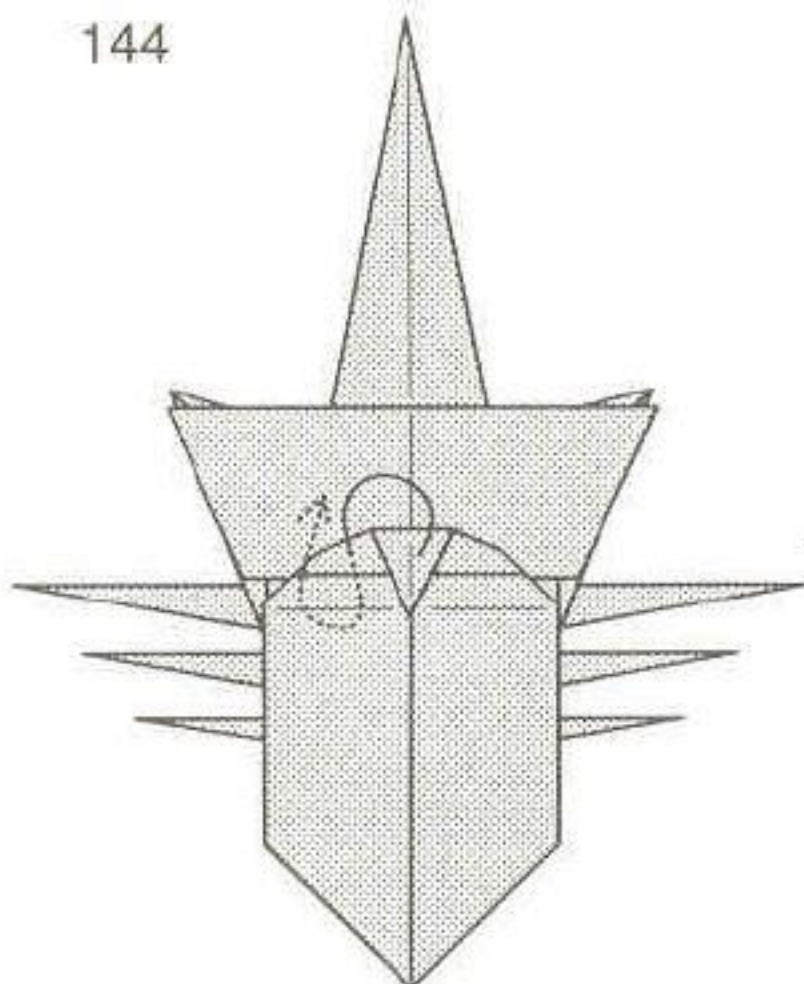


143

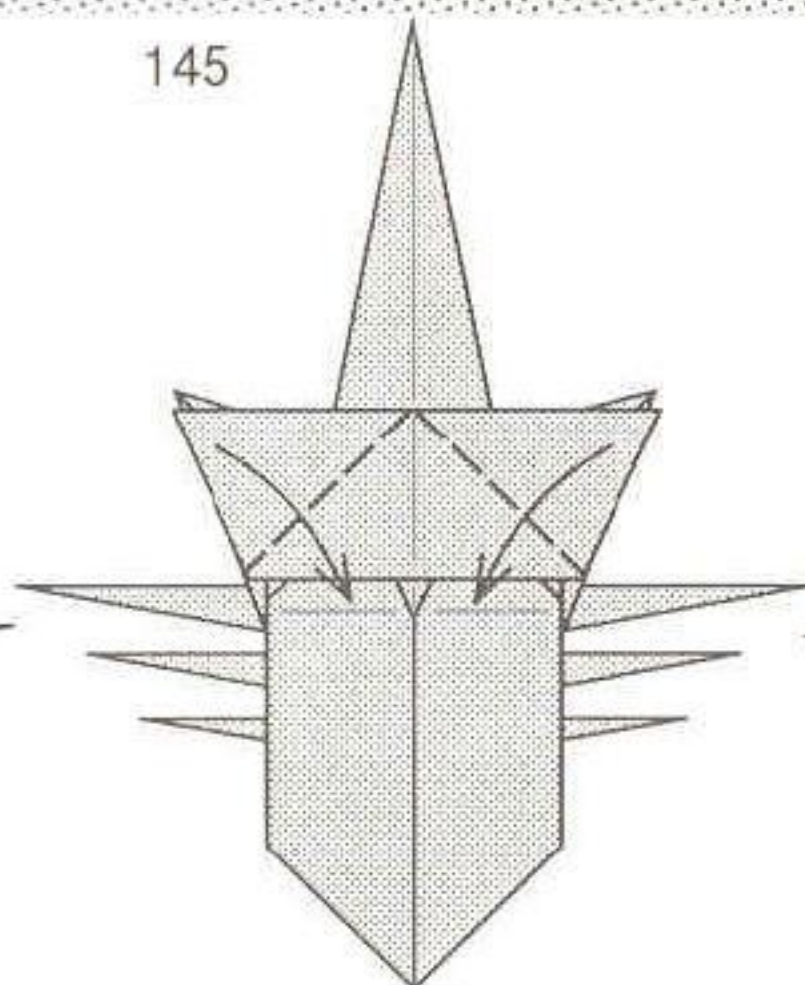


カドを少し
内側に折り込む

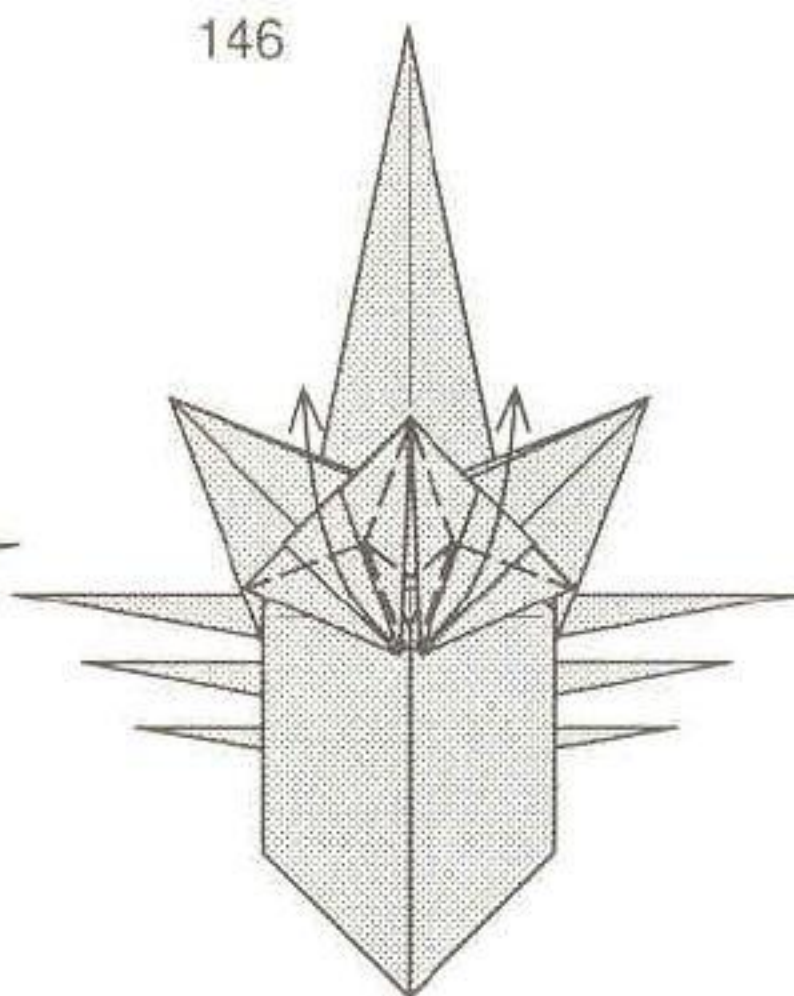
144



145

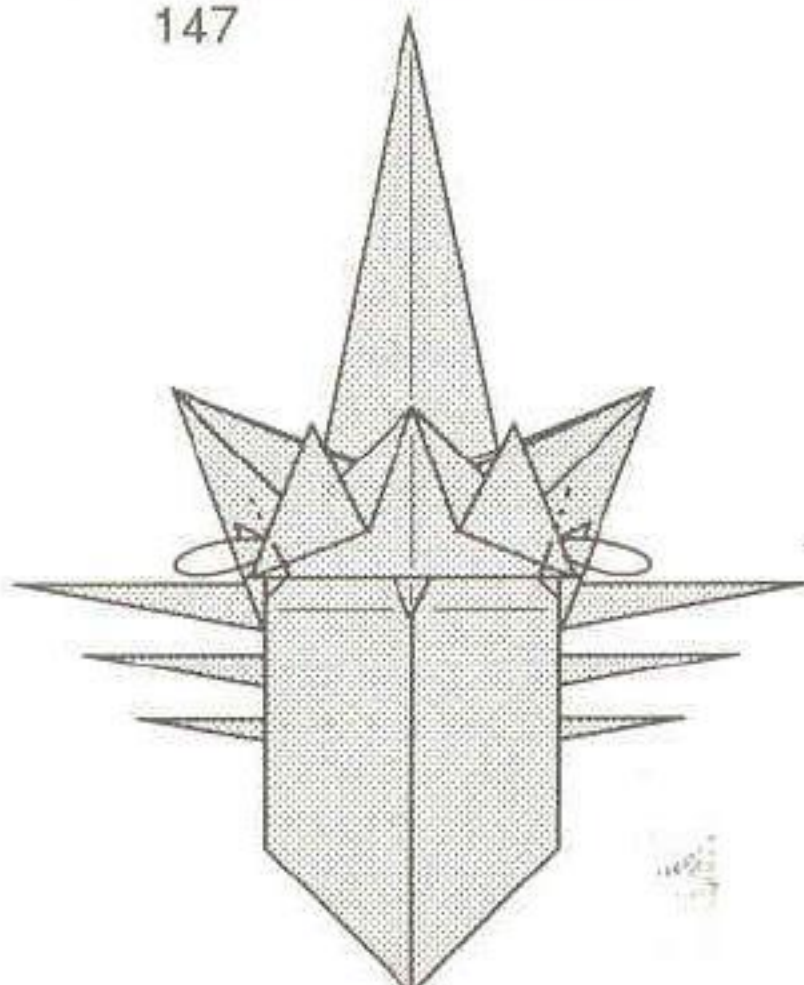


146



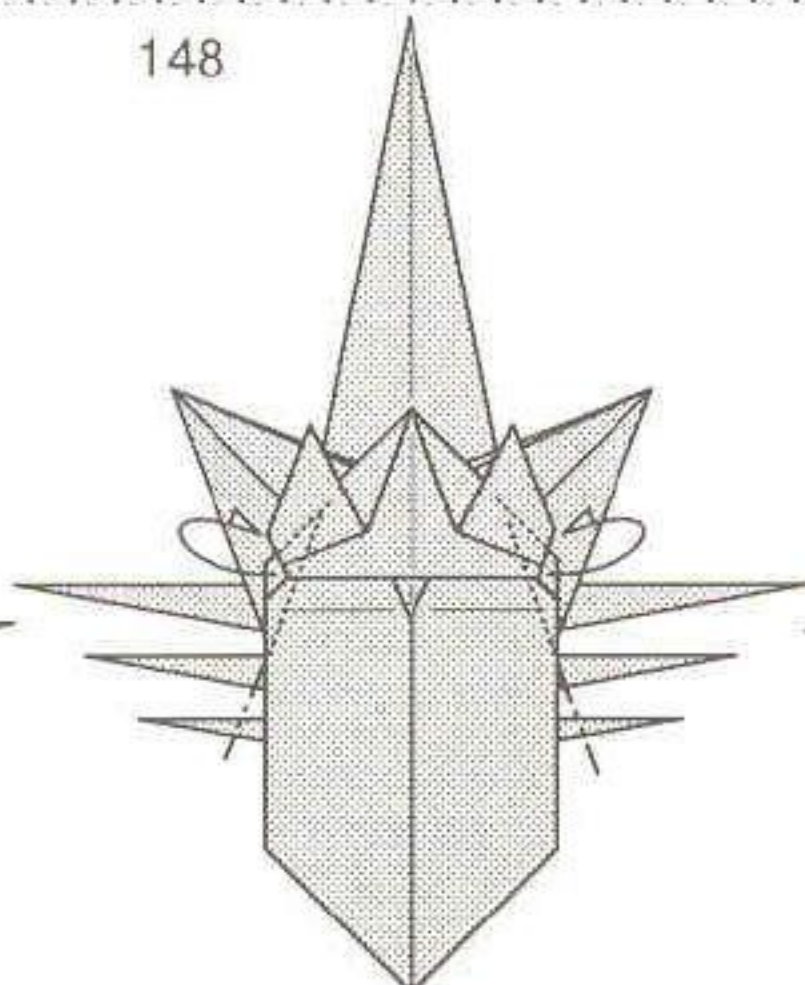
下の袋に差し込む

147



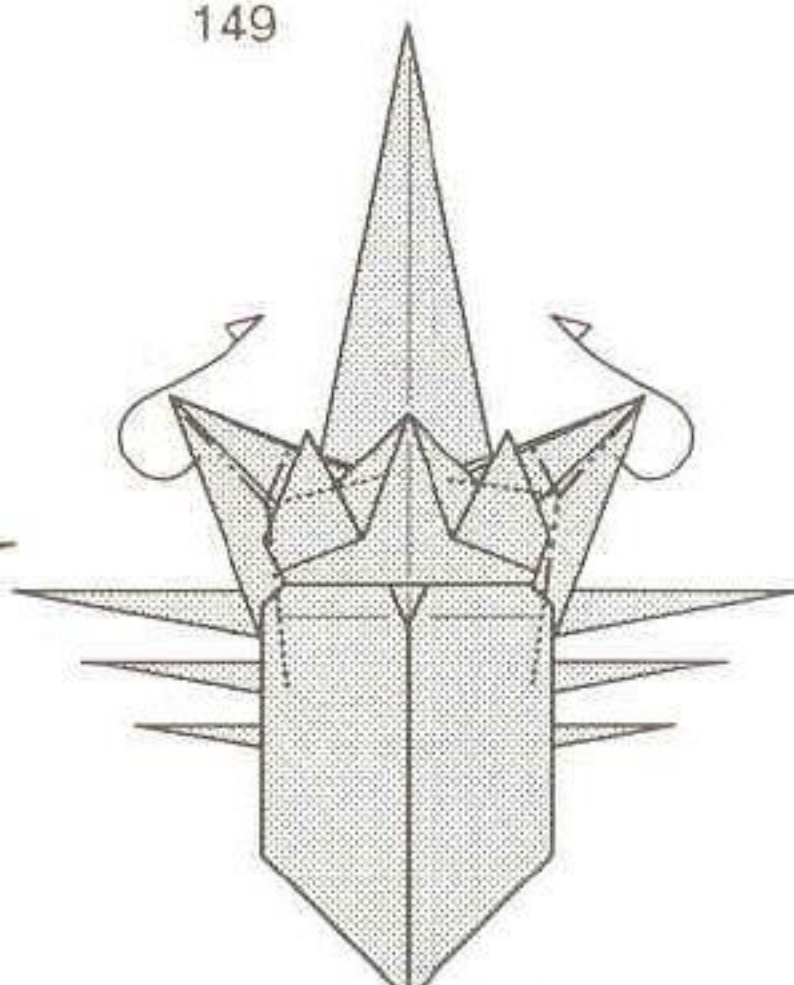
内側に折り込む

148



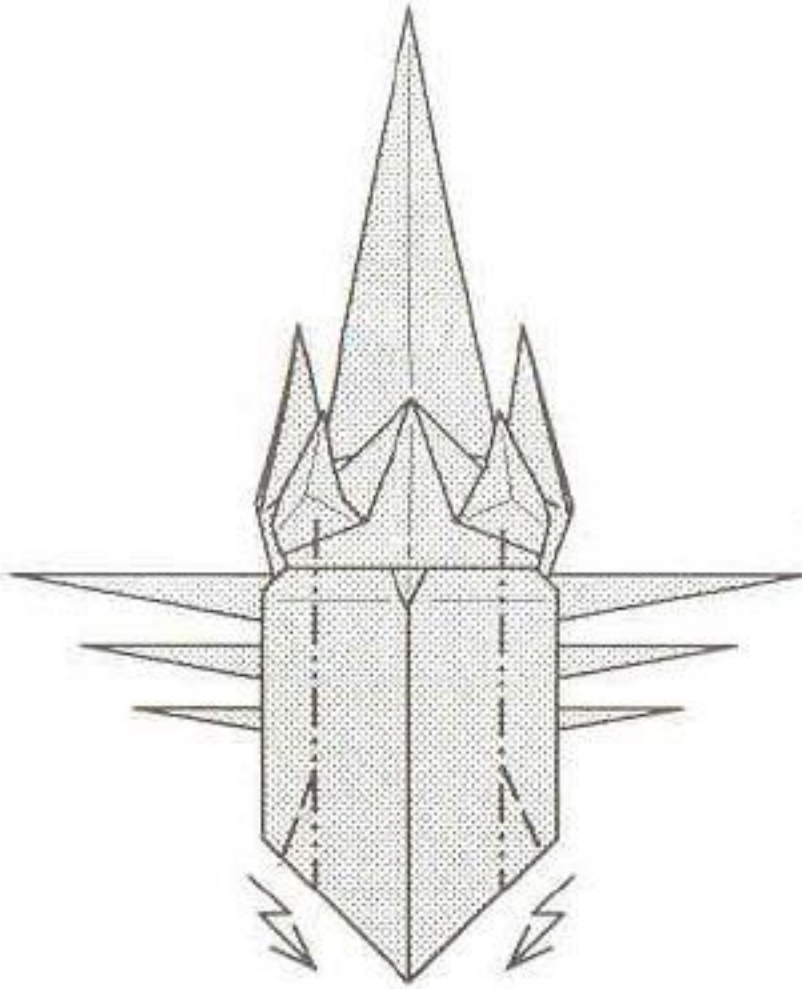
内側に折り込む

149



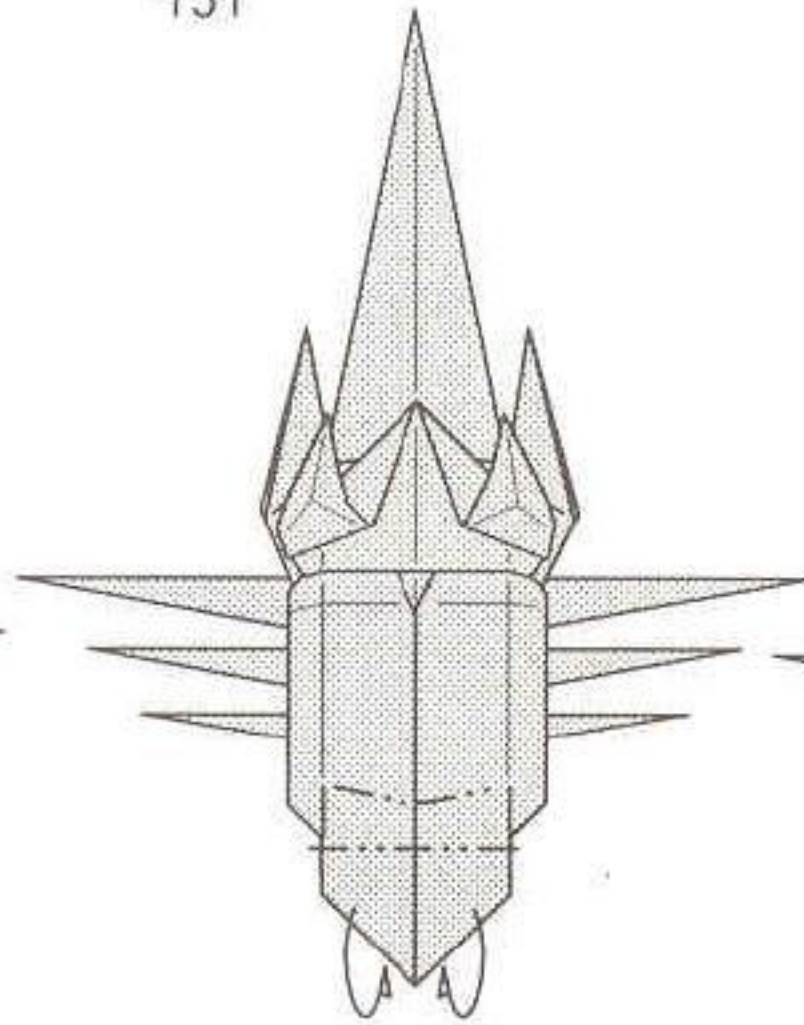
ツノを細く折る

150



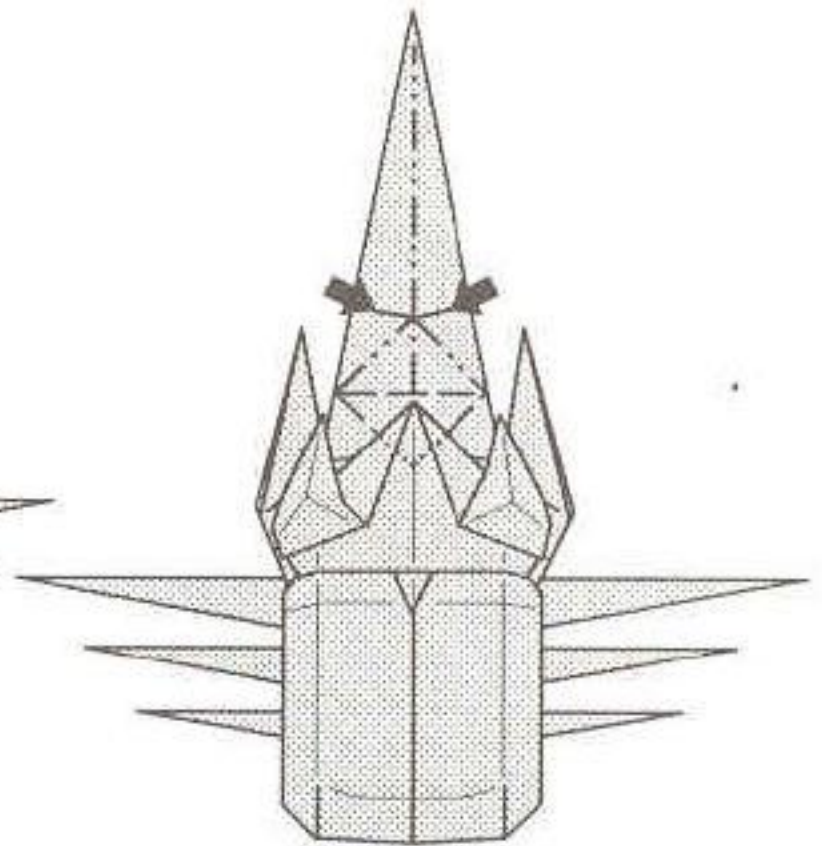
お尻を立体的に段折り

151



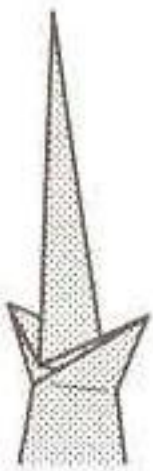
内側にしまいこむ

152



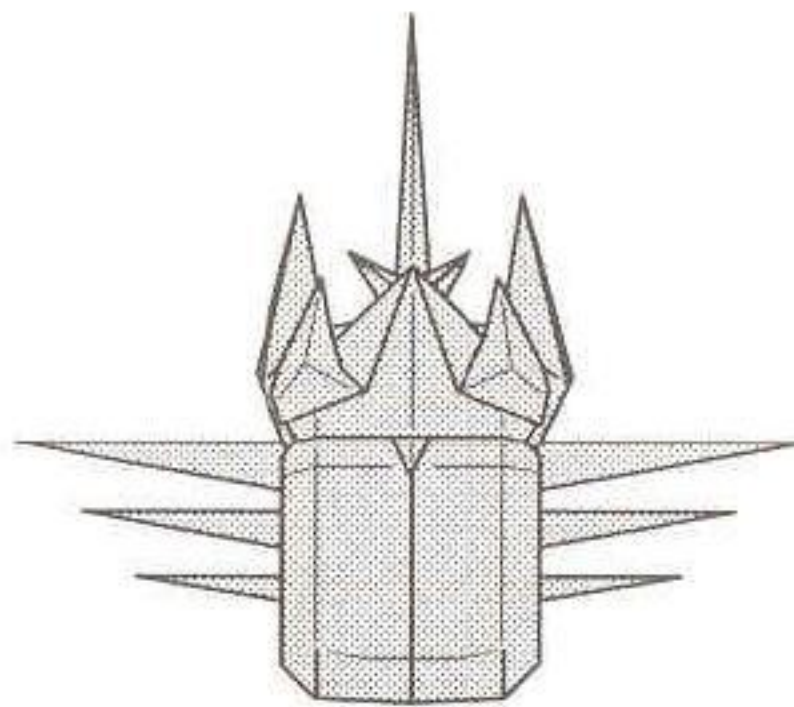
頭とツノを折る

153



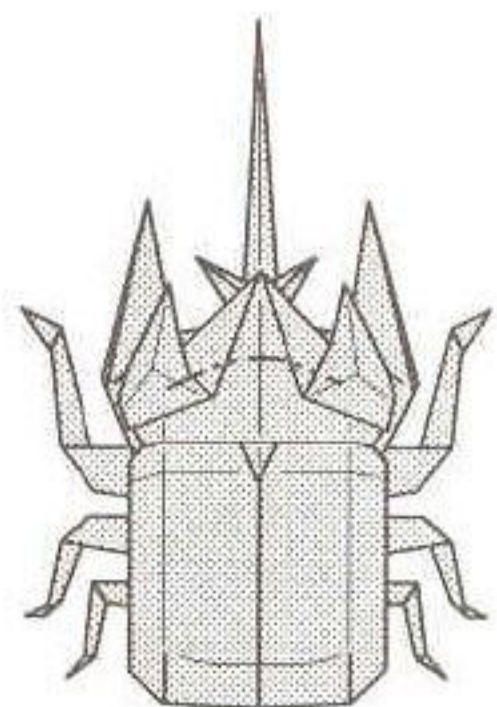
ツノを横から見た形

154



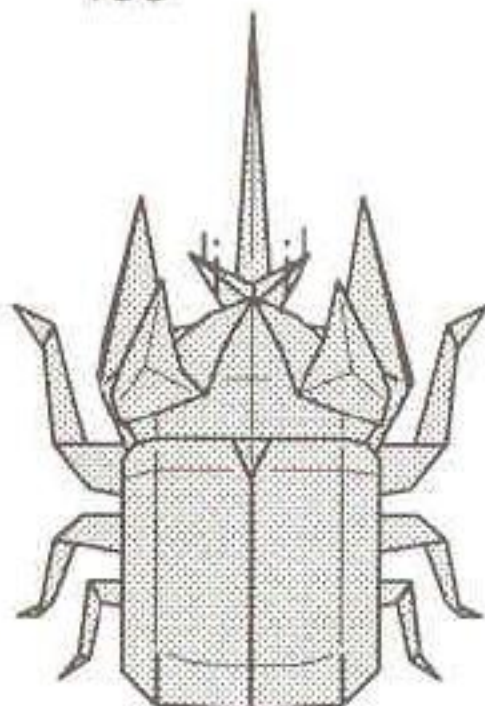
足をそれぞれ折る

155



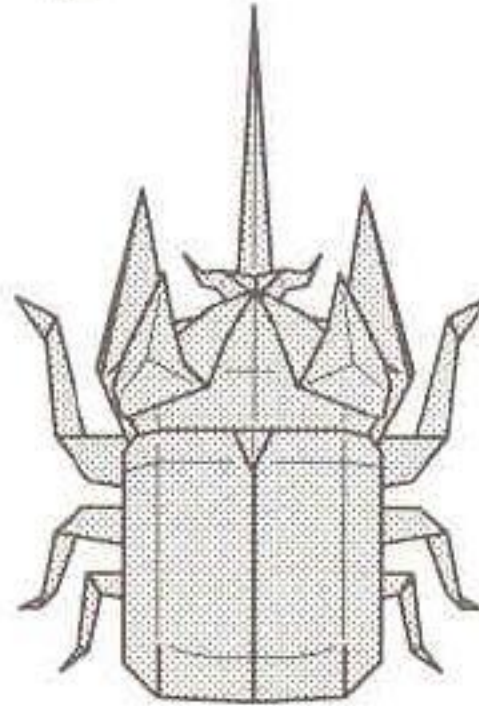
頭の部分に丸みをつける

156



触角をカッコよく

157



できあがり
細かな仕上げは
おまかせいたします。



Rabbit Ear

つまみおり

折り紙愛好家との交流を持つ手段としてコンベンションは定着している。皆さんも気軽に参加してみても如何ですか。11月には静岡市でもありますよ。



▲吉野スケルトンのライフサイズ<トリケラトプス>

Southeastern Origami Festival Charlotte, North Carolina

Southeastern Origami Festival というのが、9月22日から27日までの6日間、アメリカ North Carolina 州の Charlotte で開かれた。Charlotte の町はまるで兜町か、ウォール街。大きな銀行や証券会社ばかりが建ち並んだような町だ。町中ではコンビニもなければ、スーパーも無い。生活圏の全ては郊外型のようである。歩いている人もほとんどがビジネスマン。そんなビル街のロビーを使って、世界一疲れる折り紙展が開かれた。

ここの大会は2年に一度開かれていて、前回、故、吉野一生氏のティラノサウルス全身骨格がライフサイズで展示されたことで知られている。今回もメイン会場になっている Nations Bank の大きなロービーには、前回の T-rex に加え、同じ吉野作品でトリケラトプスのスケルトンが製作され、二つのライフサイズの作品が偉容を誇っていた。

同じ会場には大御所吉沢章氏のお馴染みの作品群が展示された。さすが、お弟子さん(?)が5人来ていて、白手袋で6~7時間掛けて展示作業をしていた。吉沢氏ご自身は直前に参加がキャンセルされて、いらしていなかったのだ。(注・吉沢氏は布施知子さんと二人、日本からの招待者) 実は前日に、スザンナさん(ドイツ)が同じように白手袋で、7~8時間掛けて展示していたのだが、気に入

らなかったのだろう。

世界一疲れる折り紙展

作品展示はこの他に Charlotte の町中10カ所ほどに分かれて展示されていて、1周すると軽く1キロ位は歩くことになる。世界一疲れる折り紙展だ。他にも空港のロビーにも展示されていた。

作品はお手折りのものから愛好家が折ったものまで数多く展示されていた。目についたところでは、川畑文昭さんのヨーダが1.2メートルの高さに折られていたり、モンちゃん(ジョン・モントロール氏)の恐竜が2メートルほどの大きさで展示されていたり。またお手折りではマイケル・レーン氏の実物大の自転車、エリック・ジョアゼル氏(フランス)のマスク、ポール・ジャクソン氏(イギリス)のオブジェ、マイケル・ラフォース氏の日本的な感覚で表現された「こい」、「蝶の標本」な

どはロビー展示の他に、特別なギャラリーで展示販売されていた。ちなみに価格はジョアゼル氏のものが1,500~2,000ドル、ジャクソン氏のものが250~500ドル、ラフォース氏のものが450ドル程の値段がついていた。

変わったところでは Americas Paper Cap Championship. 折り紙で作った舟を使ってレースをし、チャンピオンを決めるといったもので、優勝者にはエリック・

ジョアゼル氏が作った Paper Cap Trophy が次の大会までの2年間授与されるというもの。トロフィーの作品は素晴らしかった。



▲エリック・ジョアゼル氏が作ったトロフィー

▼マイケル・レーン氏の実物大の自転車





▲大きな箱から次々に小さな箱が出てくる布施教室

ここはオリガミ・フェスティバルというだけあって、普通のコンベンションとは違って全てショーアップされている。

22日から始まるのだが、24日までにはほとんど郊外の学校、小、中、高に出向いての折り紙教室。何でも学校が7時頃から始まるということで、我々の出発も早く戸惑う。参加したところは美術の時間の教室だったようで、広い教室には沢山の絵や、造形物が置かれていた。ここで教えるのは布施さん。十八番のお箱を教えていた。「取り出しましたる箱は箱でも箱が違うよお客さん」なんてことは言いませんが、皆がのぞき込む手元で、一つの箱から次々と小さくなって出てくる魔法の箱に魅せられ、自然体で折り紙教室になっていく。

22、23、24日と遠方よりの参加者が到着する。なつかしい顔、見たことのある顔、名前だけは知っている人など日に日に増えていくのでなぜかワクワクする。大勢の人と出会い折り紙談義に花を咲かせるのがまた楽しい。夜は、Origami USAのお世話で、毎日特徴のあるレストランに案内され、長旅をするものにとって心安まるケアである。

25日この日から本格的な会が始まった。土曜、日曜の折り紙教室参加の受付が始まり、折り紙ショップも開店した。折り紙ショップは折り紙の本や、紙、作品や、Tシャツ、はっぴなどがならべられ、扱う人達はそれを生業としているプロだ。

物を売ってもかまわないということで、「折紙探偵団」会員募集と、「おりがみはうす」の本、「をる」の折り図集な

どの注文を取った。それなりに注文がありよかったのだが、2日目に場所代を請求され、75ドルも払った。プロが売っている場所なのだからあたりまえといえばあたりまえなんだが。

ショーアップされているといえは極めつけが土曜の夜にあった。バンドが入っていて、折り紙の歌に始まり、プロらしき人間のコント。折り紙のコントなので、見ているだけで面白く、愉快であった。探偵団の手品師和久さんに近い人もいたり、次から次へと繰り出すショーは、我々が折り紙の中で思いつく範囲を超えていた。

ファッション・ショー

最後のショーはファッションショー、折り紙の作品をあしらったベスト、モンちゃんのファンなのだろうモンちゃんの作品を野球帽にごてごてと幾つも貼り付けていた少年。花を沢山つけたドレスを着た少女。クリス・パルマー氏のねじり折りの利いたネクタイ。高濱利恵さんの「佐渡おけさ」の作品を着て出てきたベスマンさん。ガウンとも着物とも判断のつけようがない着物(?)を着て出てきたスザンナさん。

モンちゃん
の作品を
飾った
帽子の少年



花でいっぱい
のドレスを着た少女

エリック・ジョアセル氏のマスクの講演にて



土、日

に行われた折り紙の教室はニューヨークのOrigami USA とほとんど同じスタイル。Origami USA Convention の地方版といったところか。しかし、ここでも会場の建物が幾つにも分かれていて、皆、自分の選んだ教室にたどり着くのが大変のようであった。

土、日のお昼休みのを利用して開かれた、布施さん、ジョアセル氏の特別講演は人気があった。とくにジョアセル氏のお面の基本形の話は新鮮で、皆、興味深く聞き入っていた。

熱くながーい Southeastern Origami Festival も大成功のようで、2年後の開催に向けて、次のスケルトンの製作に入るとのこと、代表のジョナサン・バクスター氏は「誰かいいモデルを持っていないか。あったら紹介してくれ」と言っていた。こころあたりのある方は事務局まで。

期間中、何人かの方に来年の折紙探偵団10周年記念である、「第5回折紙探偵団コンベンション」へ誘ってみたところ、7〜8人が参加の意思を表してくれた。来てもらうからには記憶に残る大会にしたい。

我々も、海外のコンベンションに参加すると、いつも新鮮な喜びと感動を得て帰ってくる。それは、受け入れ側が海外からのゲストということで、手厚くもてなしてくれるからに他ならない。遠方から来てくれるゲストに、心地よい探偵団のコンベンションを味わってもらえるよう、コンベンションの前後のことも含めたケアを考えなくてはならない。

それには「皆さんの協力無しでは成功しません。一人でも多くの方の積極的な援助、協力をお願いします。」



折紙探偵団 静岡コンベンション 参加者募集

静岡・静岡市

11月22日(日)～23日(月・祭)

折紙探偵団が開く「折紙探偵団コンベンション」の地方版、静岡コンベンションの開催が迫ってきた。地元会員による準備も着々と進められており、地方の折り紙ネットワーク作りに役立てられるものと周囲の関心も高い。特に講師陣の豪華さは、東京大会のようである。

豪華な講師陣

大会は、中村静さんを中心とした地元講師陣を中心に展開される。やさしいおりがみ、きれいなおりがみ(どっかで聞いたようなネーミングだ)、アクセサリーなどの実用的な折り紙は、探偵団のコンベンションは難しすぎるという人には喜ばれることだろう。

また、初めての地方大会ということで、探偵団会員の関心も高く、折紙探偵団新聞紙上でお馴染みの講師陣が多数参加してくれることになった。宿泊

も同じ会場でできるので、朝まで折り紙になるところも出てくるはず。教室を受け持つ東京からの講師陣は、西川誠司、木村良寿、前川淳、北條高史、千葉京、小笹径一、濱田隆幸、山口真の各氏他に布施知子(長野)も応援に来る。地元では山梨明子(清水)さんも教室を受け持つ。

●コンベンションの主な内容

大会名

折紙探偵団 第1回静岡コンベンション

日時

11月22日(日)

10:00～受付

12:30～開会式、全体会

■全体講演2本立て

折り紙交通講話＝中村 静(浜松)

折り紙という方法＝北條高史(筑波)

13:00～折り紙教室

18:00～懇親会

11月23日(月・祭)

10:00～受付

10:40～折り紙教室

16:00～閉会式

場所 たちばな会館(静岡市)

参加費 4,000円(折り紙用紙付き)

親子割引有り

懇親会 大人4,000円、中学生3,000円

小学生2,000円

宿泊 朝食つき5,000円

★参加費は当日会場にてお支払い下さい。

●申込用紙、資料をご希望の方は返信用切手90円を同封の上、探偵団事務局にご請求下さい。

●折って折って折りまくる2日間皆さんの参加を心よりお待ちしております。(静岡コンベンション運営委員)

刺激の少なかった NOA シンポジウム

神谷哲史

探偵団新聞ではコンベンションの影で忘れられていたNOAシンポジウムが、8月2日から4日にかけて行われました。今回は300人以上の折り紙好きが岡山に集まりました。1日目、相変わらず長い開会式と講演会(計2時間半)。開会式の終わった時には「やっと終わった」と言う小学生の声も聞こえました。講演会では桃太郎の話をしていましたが、まったく聞いてない人もいました。・・・私か。

続くゲーム大会、1回戦は折り鶴、やっこさん、だまし船の早折り。これなら勝ったも同然かと思いきや1番は韓国の方でした。でもこっちはフライングなしだ(むこうはどうか知りませんが)。一応4位あたりに入り賞品を入手。が、その賞品が4cmの折り紙、超難解ばかり折っている私には使い道が・・・。その後のタイムアタックでは、木下剛君が2分という記録を出しました。2回戦は先ほど折った物でじゃんけん。こちらはあっさり敗退。3回戦は三択問題でまた賞品を・・・

どうしよう。それにしても2回戦、3回戦は後出しが目立ちました。やはり正々堂々とやって欲しいものですね。なおこのとき折られた鶴はリアルな折り鶴に、だまし船は動くゴーストに改造されました。夜は仮眠(力つきるとも言う)を取りつつ徹夜状態。話題の中心はもちろん折り紙、ではなくなぜかヒーローの話で盛り上がる。

2日目は、ずっと折り紙市場にいたくせに何も売らず、買った物といえば木下剛君のイエロービースト(ピカチュウ)のみ。この作品、不切正方形一枚で背中の中の模様までついているすぐれものです。で、残りの時間一体何をしていたかと言えば動くゴーストを奇怪な動きをするおぼれる人に改造していた。何をしに來たのやら。そして懇親会。実は少しの不安があった。なぜかというと前日の夕食がナイフとフォークの洋食だったからです。食事は洋食でしたが箸があったから良しとします。舞台の上では歌や踊り、手品などで盛り上がっていたようですが私は見ていま

せんでした。実際一部の人は拍手だけだと思うのですが、どうなのでしょうね。その夜、また徹夜かと思われたが、木下一郎さんの説得によってこの事態は回避された。とは言っても寝たのは3時頃なんですけどね。3日目の全体会では川崎さんの講演「折り鶴進化論」などがあったのだが、前日の睡眠不足がたたり途中で意識が・・・、目が覚めたら川崎さんの講演が終わっていた。

みなさん、睡眠には注意しましょう。あ、徹夜する人などあまりいないか。

最後に、個人的には今回は刺激が少ないシンポジウムでした。原因の一つに毎年あまり変わらないことがあると思います。また、あまりに人数が多いのもどうかと思います。あ、来年は福島らしいです。

'98 折紙探偵団忘年会

12月19日(土) 午後6時から

会費 4～4,500円

場所 文京区民センター

●恒例のビンゴやクイズなどのイベントがあり、気楽で楽しい忘年会です。

皆様の参加をお待ちしています。申込、問い合わせは探偵団事務局まで。

折り紙多面体作家



9月14日・15日放送のNHK教育「やってみよう・なんでも実験」に川村みゆきさんが出演しました。その名も「折って広がる折り紙の世界」。冒頭はお約束の巨大折り紙。直径1mのサッカーボール型多面体に、「こんな大きな折り

紙、どうやって折るんでしょう」って、大きな紙を使えば大きな折り紙が折れるんや。そんなの当たり前やん。

さて、いよいよ「折り紙多面体作家」川村みゆきさん登場。川村さんが折り紙多面体作家なら、川崎さんは折り紙

薔薇作家だし、前川さんは折り紙悪魔作家ちゅうことやね。

この番組は科学教育番組なので、とりあえず三浦折りははずせません。三浦折りは紙をよせたときにできるしわ(座屈ともいう)のパターンがもたになっているという話から、折り紙は物体の強度とかたちの関係を研究するのに適しているちゅうんやけど、ほんまかいな。実際に折り紙を使って研究をしているという話は聞いたことがないで。

続いては折り紙の幾何学。折り紙を使って正三角形を作図します。まあこれは基本中の基本。中学入試にもしよっちゅう使われとるくらいで、小学生にもわかるちゅうことやね。さてお次は、と思ったら、あれれ、もう終わりかい。せっかく川村さんが出演しているのだから、「任意の角の三等分はギリシャの三大難問の一つで、定規とコンパスでは作図できないことが証明されているが、折り紙では作図できるんだぜ」、ぐ

らいのことはやってほしかったなあ。

さて、例のサッカーボールは、川村さんと

番組アシスタントの中嶋美年子さん、パルティノン多摩で折り紙インストラクターをしている原田和実さん、そして7人のこびとたち、もとい、こどもたちが4時間かけて折ったそう。セミが鳴く中、広場にテーブルを持ち出して、和気あいあいとできあがり。「糊もテープも使ってないんですよ〜」といていたわりには、運ぶ途中で、あらら、こわれてもうたで。



川村みゆきさん

ジェレミー・シェーファー氏から感謝状

折紙探偵団の皆様へ

ジェレミー・シェーファー 訳・Kayo Kurata

訪日の際は、私を暖かく迎えて下さり、大変親切にして下さって、有り難うございました。

皆様にお会いでき、一緒に折り紙ができて、素晴らしい時間を過ごせたことを深く感謝しています。日本の文化、日本の言葉、日本の折り紙の良さを、改めて理解でき、それをお土産に帰国する事が出来ました。

コンベンションに参加でき、特にクラスで教えたり、教えられたり、土曜日の夜のパフォーマンス、箱いっぱいのお手紙、折り紙人たちのクリエーターたちとの出会い・・・。

コンベンションの後は、東京中をユニサイクルで走り回ったり、新宿通りでストリート・パフォーマンスをやったり、おいしい生(?)のおとうふを食べたり、どれも素晴らしい体験でした。

これからも、日本語は続けて勉強するつもりです。そしてこの次に日本に行ったときには、もっと自

分の気持ちを日本語で伝えられる様に(自分を表現出来るように)なりたいと思っています。

ここでちょっと訪日中に果たせなかった、私の折り紙思考を話してみたいと思います。

折り紙には言葉の壁がなく、世界中どこでも誰とでも、新しいアイデア或いはクリエイティビティーを交換することが出来る事に、私はいつの時でも驚かされる。言葉や文化は違っても、折り図は理解できるし、材料は安価でどこでも手に入る。安全で楽しく無限に新しくデザインまたは創作ができ、しかもそれに折り図があれば何回でも、誰でも、何人でも、表現することが出来る。

長い歴史の中で、ごく少数の伝承おりがみと呼ばれる物だけが、それほど進化も無く、それでも残在した。しかし今、ハイテクブームの中で折り紙の人気を高め、存続させるには、折り紙の芸術性を高めて行かなければならない。

過去50年で折り紙は、伝承芸術から抜け出して、様々なリアリティな動物達に変身を遂げてきた。また、過去10年では昆虫から恐竜まで折り尽くされ、研究され尽くされて、進歩の余地が狭くなって来たように私は思う。だから私は折り紙デザイナー達に、彼らの視点を別の方に向けるように、特に動物とかオブジェから離れて、「アイデア」を折るように進めたい。折り紙のシーン(scene- 光景、情景、景色、etc...), アクションモデル、人間の動き(生活、生き様)と言ったことを、私は探求したい。そうすれば、まだまだ無限の隠れたアイデアや、折りのテクニックが発見されるのを待っているような気がする。そして今日の折り紙デザイナー達のテクニック、技術と知識を持てれば、新しいアイデアを(アイデア自体を)折るのは必須である。

今後、幾世紀もの折り紙の存続と繁栄を願っている。

MAY THE FOLDS BE WITH YOU! (注: MAY THE FORCE BE WITH YOU! のシャレ)

おりすじ

最近の道路事情による 折り紙製作の能率低下 小笹 径一

こんな、題名ではなんのこっちゃと思う人が大多数だと思いますが、私の仕事においては大いにかかわることなのです。

近頃は、景気不振などにより道路がすいているのです。こう書いても、まだ、なんのこっちゃと思うでしょう。実は、私の仕事はトラックの運転手なのです。渋滞や信号待ちのとき、粘土板をハンドルの上に置き、紙をバタバタと折るといのがここ数年の習慣になっていました。

ところが、ここ最近においては、不景気のせいだかなんだか、道路がすいていて、折ろうと思うと、前の車が走り出してしまうとか、前に車がない状態になっていたりするのです。おもしろそうな形や折り方を思いついても、それをやろうとした時には車が走り出している。そうすると、せっかく思い付いたアイデアもつい忘れてしまうというような、悪循環がおこり製作するのに時間がかかったり、結局できなかつたりしています。(いいわけがましいかな) 思えば2年ぐらい前、どこでだか忘れたが、笠原さんの、「柴犬」を折って人に見せたところ、大変喜んでくれました。それをきっかけにして、15年ぶりぐらいに前川さんの、「ビバ／おりがみ」を、部屋の本棚から探し

だし、あの「悪魔」を折ってみると意外におぼえているもので、スイスイと折れ、またこれを人に見せると、うけまくり、といった具合に折り紙を折る楽しさと見せる喜びを思い出してきました。また、そのころにとある雑誌の切り抜き(今も持っている吉野さんがとりあげられた少年誌の1ページ)に「おりがみはうす」の住所、電話があったので、電話をしてみることに。しかし、雑誌は34年前のもの、失礼な私は「まだやってますか」なんて言ってしまい電話の向こうの声を不機嫌そうにしてしまったのをおぼえています。やっと「おりがみはうす」に行ける時間ができたので、訪ねてみるとそこには、川畑さんの恐竜たちなどの作品や、「をる」などのいろいろな本があり自分が作ろうとするものに、大変参考になりました。(このころにキングギドラができました。)

思い出話が長くなりそうなので、この辺で本題へ戻ると(やっぱりいいわけだー)ひと月に1作品とは思っている私ですが、どうも近頃思いつかない、でてこない。やっぱりいいわけばかりに、なりそうなのでまた機会がありましたら、「オイオイ終わっちゃうのかい」と言われても、文章を書くのはにがてなものであしからず。

▼ TreeMaker Ver4.0 を見入る前川氏と西川氏



ラング氏来訪

10月10日(土)、ロバート・ラング氏がおりがみはうすを訪問された。今回は、レーザー関連の学会への出席(奈良で行われた)と東京の企業との仕事上の打ち合わせ等を目的とした来日ということで、その合間を利用して折紙探偵団の面々(山口、前川、西川、北條、小松、羽鳥各氏他... 20名弱)とのしばしの交流が実現したわけだ。ロバート・ラング氏については、説明の必要もないと思うが、世界のコンプレックス折り紙界を強力にリードする作家かつ研究家である。今回も、氏自身のプログラムである折紙設計プログラム「TreeMaker Ver4.0」のデモンストレーションを中心におりがみはうすに集まった面々と共に大いに盛り上がった。折紙設計プログラム「おりお」の開発者目黒俊幸氏は都合がつかず対面はなく、ラング氏もちょっと残念そうであった。「TreeMaker Ver4.0」は、名前の如く、目的の作品を樹状図として一般化したとき、その樹状図を折り上げるための展開図が得られる。角の長さや角の配置位置、角度などを指定して、有用な展開図を探っていくことが出来る。各パラメーターの

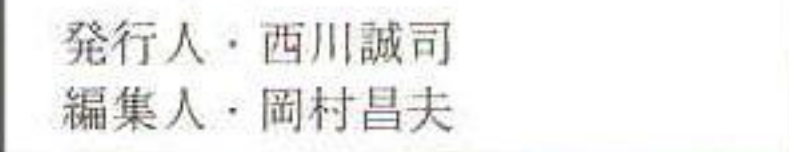
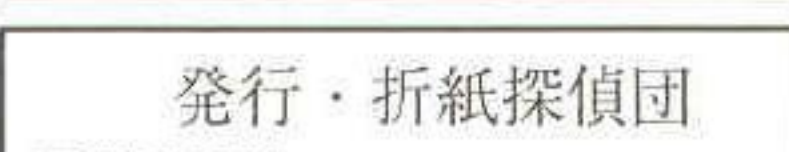
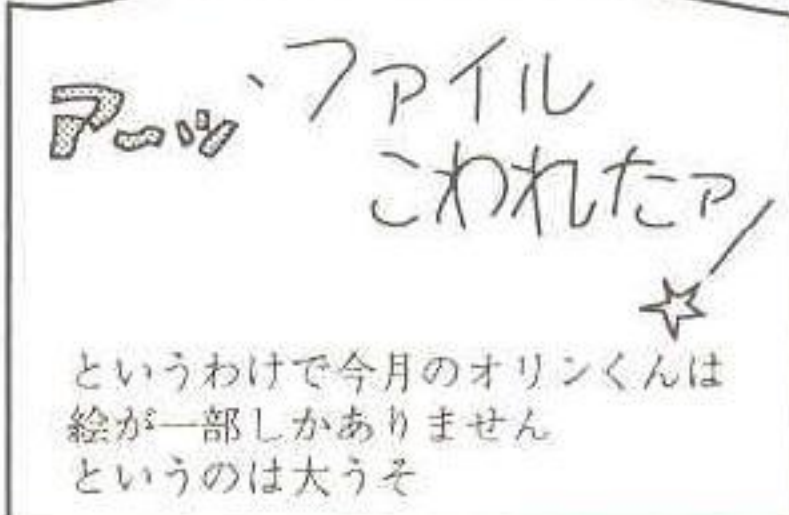
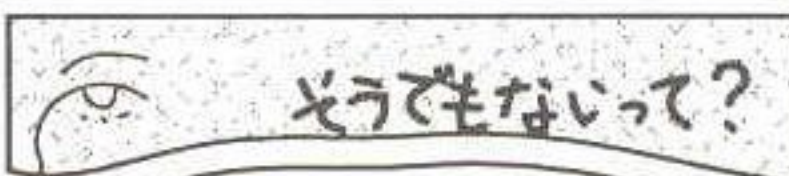
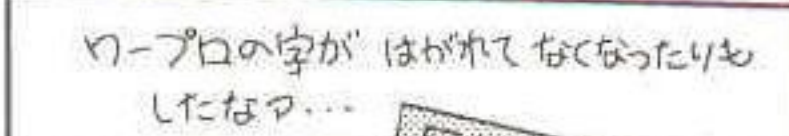
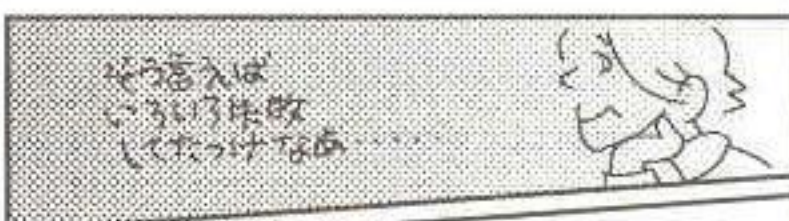
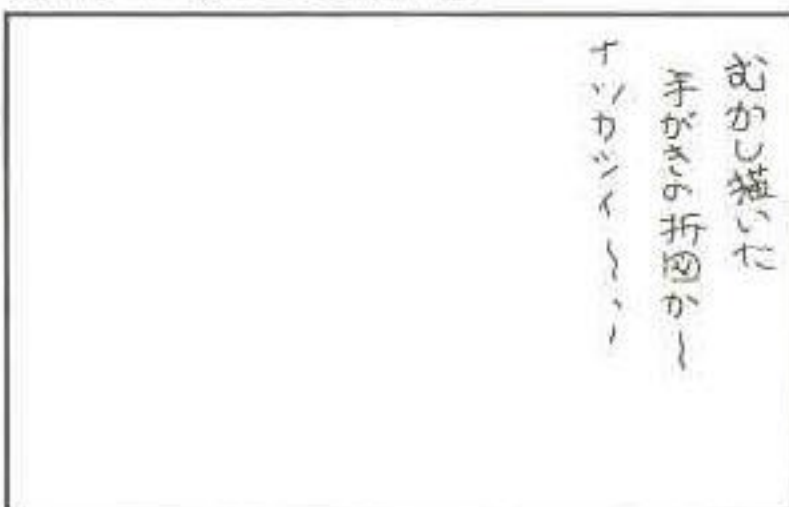
優先順位などは、設計折紙に対してある程度の知識は必要だが、上手い使い方を考えれば強力なツールになるかも知れない。(例えば鹿の種類による角の枝分かれの違いを正確に表現しようとする場合など。ラング氏談)「TreeMaker ver4.0」は、メニューやインターフェースの充実ぶりが市販ソフトを彷彿とさせる仕上がりで「計算中の円や線の動きを見ているだけでも結構楽しい。」(北條氏談) 本業の忙しい中よくこれだけのものが作れるものだと驚愕する。プログラムはおりがみはうすに有るので機会があれば是非ご覧いただきたい。ラング氏は、日本企業との仕事のつきあいは多いそうで、年に1,2度の来日はあるとのこと。みなさん次の機会もお楽しみに。



迷探偵 オリン君

作: 山梨雅弘

折図かこうかな



定価 300 円

発行・折紙探偵団

〒113-0001

東京都文京区白山1-33-8-216

ギャラリーおりがみはうす内

Phone (03) 5684-6080

発行人・西川誠司

編集人・岡村昌夫